

一キは運轉手の手を離れたことは無かつた幸ひ驛着後十分足らずにて無事東京行の車中の人となるを得た目まぐるしかりし今日の旅を追想す。藤澤にて下車、電車にて片瀬に至り、既に日暮れて灯海に碎くる江の島に抱かれて、波の音を夢に岩本樓の一室に疲れし身を横ふ。

江の島

麻生 龜吉

第三日 (五月十三日) 曇後晴

前日の疲労も十分寝るこゝが出来たので、昨夜はぐつするこゝに寝込んでしまつた。江の島に打ちよせる波に夢を破られて俄破さ起き上つたのが午前六時三十分。岩本樓を八時に出發、門前の九官島に「さよなら」を告げて石高道をふんで、江の島辨財天に参拜した。それから左に折れて、その末社にも思はれる御宮に参詣して御岩屋に向つた。上り下りの山路で、早疲れるこゝ夥しい。海近くなるこゝ、道の兩側にさゞえ貝殻等の土産物賣る店が多く、聲をからして客を呼んでゐるだら／＼坂を下るこゝすぐ濱邊で、道は斷崖の中腹に通じてゐる。此のあたりは「見晴らし」が大へんよく、江の島さしてうちよせる大平洋の波も、のたり／＼と穏やかに、全く泰平の御代の象徴である。奥宮トンネルをくゞつて、御岩屋の前に出る。岩屋はさゝやかな棧橋を渡つて入る事が出来る。中は二分して右方は江の島神社を、左方は天照大神、須佐之男

命を祀る御堂が安置されてゐる。入口で蠟燭を買つて暗い中を手探り、足探りに進むと、二つに分れてゐる所から急に穴が小さくなる。誰やらが「痛い！」と號ぶ。大方丈の高い者が頭でも打ちつけたのであらう。戻りは目がなれて左程に不自由せず出るこゝが出来た。入口には鳩の巢が多く、鳩糞であたりが汚れて美觀を損するこゝ夥しい。海は丁度引き潮であるから、海際に沿ふて歸る。

向ふの濱邊から一群の學生がやつて來た。見たやうな帽子だと思つて近づいて見ると、彦工の生徒であつた。聞けば東京方面見學を了へて歸りに此處に寄つたのださうだ。郷里の學生に出あつて嬉しい事もさる事ながら、東京で聞いては未だ見ぬ都に思ひを走らして、思はず心臓の鼓動も高く胸をうつ。つきぬ名残を惜しみ乍ら別れる。前のトンネルの入口に出て元來た道を引き返した。中津の宮に参詣してから、なつかしい江の島に別をつけて棧橋を渡つた。九時五十分一同片瀬の濱で記念の撮影をした。かなり風が激しかつた爲にかみ顔が大分うつたであらう。

七里ヶ濱、鎌倉

片瀬を過ぎて龍口寺に詣でた。鎌倉幕府の刑場で、元寇の時、時宗が杜世忠以下の元使を斬つたのも、富士の仇討で名高い孝子曾我五郎が斬られたのも此處である。

そこから引き返へして電車で長谷、鎌倉に行つた。七里ヶ濱は電車の足下迄這つてゐて、點々青くなつてゐるのは藻か海苔かであらう。稻村ヶ崎は七里ヶ濱の一寸突出た岬角で昔新田左中將が御剣を海に投じて神に戦勝を祈つた古戦場である。極樂寺坂は鎌倉の情みこしてゐる要害の地である。其れから其れへこ聯想してゐる中に電車は長谷寺についた。道の二三町も歩いたであらう。目の前に露座の大佛が現れる。後ににゆつゝ突き出てゐる松が歌によまれてゐるのださうだ。長谷寺は其處から極く近くにある。流石は鎌倉古刹の一つだけあつて何もなく物さびて古めかしい。がーんこ本堂にひびく音は遠き昔を追想させるに充分だ。元正天皇の養老年間の建立で、時を経るこゝ一五〇〇年、本像は十一面觀世音菩薩さか。又電車で鎌倉に向ふ。鎌倉につく。停留所から櫻の若葉かほる人道を行く事三町余で鶴ヶ岡八幡宮に着いた。

公曉のかくれた大銀杏が亭々高く突き立つてゐる。本殿は震災にかゝり唯今改築中で我等は假の宮居に参拜した。「しづやしづ、しづのを田まき繰り返し返し人々を偲びつゝ」こ歌つて靜御前が舞つたこいふ拜殿も亦震災に罹つて残つてゐる礎に其の大きさを偲ぶ許りである。

柳原を右に見て小やかな土橋を渡るこ若宮である。その向ふが白旗神社で頼朝公を祀る。人家の間を行くこ五六町餘鎌倉宮に参拜した。本殿は矢張り震災にかゝり改築中である

假の宮居に参拜したのが丁度十二時十分であつた。裏へ廻つて見るこ土牢がある。斷崖の麓を掘り入れて作つた日もさ、ない濕つぽい土牢である。國の爲さはいひ乍ら、尊貴の身を以て、斯様な所にお果てなされた宮の御心事を察し奉るこ自づこ悲憤の涙が湧き出る。汽車に後れるこいふので停留所迄十二三町の道を驅足で急いだ。やつこの事で大船行きの電車に乗込んだ。鎌倉におさらばして東京に行くのである。何だか嬉しい。胸の中に嬉しい魂があるやうだ。何時になつたらなくなるか。

東京の第一日

大船發二時十五分の汽車に乗込む。汽車の中は大分雑踏してゐる。隣りに腰かけてゐる見知らぬ「おぢさん」が横濱で下りるから後に坐れこいふ。世間は皆鬼ばかりではないやうだ。旅行に出てから三日目だ。弟や妹はさうしてゐるだらう。氣の弱い私はホームシックに罹りさうである。さきの「おぢさん」が色々説明して呉れる。震災の話も大分聞かされた車窓からではあるが、實際の跡を見せつけられ乍ら、話されるのだから印象が深い。話によるこ復興の聲は大きいが未だ半分も復興は出来てゐないさうである。

横濱だ！こいふ聲に窓からのぞくこ、大きな都市が展開する。バラックのトタン屋根が立ち並んで、永久的と思はれる

建物は一つも見あたらず。併し流石は日本の一二を争ふ大都市だ。震災で潰滅したといつても、やせても枯れても人口四十五萬の大都市だ。停車場の建物はバラックでも昇降する人々には復興の気分が漲つてゐる様だ。活氣がある。遙か向ふの港には海洋航行の大汽船が黒い煙を上げてゐる。古い城下町の彦根さへはひよつと見た感じが十分違ふやうだ。

品川をこゝろさ東京である。横濱さ東京はひつゝいてゐる様だ。品川の沖は和船が塲所ならぬ林を作つてゐる。汽車が東京のブラットフォームに着くさ、何だか恐ろしいやうな氣分を下りる。恐らく先生がゐないならば間違つくだらう。驛前の廣場から宮城に通ずる大通りの兩側は、丸ビルを始めとして、幾多のビルディングが立ち並んで、何か大きな力に抑へつけられて目が眩みさうだ。それに何だか寒氣もする。私には東京は不向なのだ。性が合はないのらしい。併し宮城内に入るさ少し氣分が落ちついた。千代田の老松はいや増しに綠ふかく吹き渡る松風は聖代の萬歳を祝するかのやうである。私等は和田倉門前？の廣場に整列して宮城を拜み、皇室のみ榮をお祈りした。時に四時十分前である。

それから省線電車で代々木の明治神宮に御参りする。代々木の驛から十六町許り、坦々たる大道路の美しい小砂利をふみしめて行くさ、こんもりとした森が急にひらけて神々しい質素な神宮がのぞまれる。参拜し終つてから寶物殿の前庭に

らして折角の卵もオジャン。

出發用意の命令の出たのは間もなくだつた。屋前に集合點呼を受けた。寒い！馬鹿に寒い。時は五月半だと言ふに何うした事だ。砂捲く風は傘持つ手をして非常な冷寒を覺えしめる。午前八時一行は寺一先生引率の下に、井筒屋を去り上野公園に向き出發した。止まつた所が西郷さんの銅像の前。偉大な體を冷い風に曝らして居られる。遙か眼下に大東京市を眺めた時には「あゝ大正十二年……」なんて一寸センチメンタルになる。當時の佛をしのびつゝ、今我が前に展開された東京市の復興振りに驚かされた。「しばらく解散」の命令があつたさ一向何の話も出ない。皆その邊にブラ／＼として待つて居る——堀田先生が見ね様だ——後で聞けば先生は何でも足に豆をお造りになつて、靴がはき悪かつたのださうだ——やがて集合の笛が聞けた。寺一先生が「今から自由見學を行ふ」この語を發せられ「必ず一人歩きする事勿れ、常に彦中の名を顔に刻すべし、集合は午後十時東京驛昨夜示した地點」なる御注意を受けて一同は散つた。時に午前九時。

イヨ／＼東京見物は始まる。「オイ今日は田舎振り發揮か」「ヨカラウ」三々伍々打ち連れた田舎連中の漫步——或は自動車に嚇かされ、或ひは自轉車に追はれ——三越、白木屋、松屋其の他大デパートメント等々随分金を落した事だらう。所謂銀ブラの味も知つた事だらう。唯何より嬉しいのは天氣

出て、其處で皆に分れて級長三人が寺市先生、堀田先生について井伊家訪問にいつた。時は丁度五時二十分が皆が行くには最う晚かつたので、級長三人が代表して行つたのである。訪問するさ、伯爵は留守だといふことで、先生達が挨拶して下つて歸つた。上野驛前の丸屋旅館に宿泊して、其の晩は外出十二時限の事、皆思ひ／＼の方面にぶらつく。花の都の夜は不夜城の歡樂郷である。思はず赤毛布ぶりを發揮したのもあつたらう。私も其の一人であるが。

西澤新藏

第四日（五月十四日）

昨晚の放逐に依れば今日は雨。我々一行はクリスチャンぢやないが「神よ我等が最後の一日を恵み給へ！」さ如何に祈つた事だらう。午前六時三十分……彼方此方の隅から「ウー」さ唸りながら目を覺ます。睡眠不足の不平一つ言ふ者もない。實に修學旅行なればこそだ。「オイ天氣は好いぞ」はや誰か叫ぶ。朝の空は些か曇り勝ちだがそれでも雨は大丈夫らしい。あゝ天は我等に幸し給へるか！

「今日は最後だウンさやれ」なんて言ひながら、朝から應援歌をやり出す。朝食の時今日の辨當の代りだと言ふので生卵が一個づつ配られた。早速手を出す、所が元氣溢れて卵を皿の外に割つてしまふ。或者は御膳の上に、或者は疊の上に滑

快晴なる事——風は少し冷たかつたが——所は帝都なりさ難も、やはり時間は變らない。はや大東京市にも五月の夕が訪れた。萬燈一時に點火されて夜の街は層一層美化された。午後九時——集合時間は迫つた。ゾロ／＼ミステーションに向つて集つて来る。「えゝ天氣やつたなあ」「だが寒かつたやないか」「何處へ行つて来た？」「アカなんだ、一向歩かずで」實際色々悲喜劇が起つた事だらう。「オイ俺のはこれだなんて活動寫眞のプログラムを見せ合つてゐる連中」「俺は土産無しだ」なんて意張つてゐる奴、「一寸これを見て居てくれヨ便所へ行つてくるから」なんて澤山の土産を友に託して居る者……等千種萬態だ。

やがて寺一先生御得意の一聲「集れ」は大東京ステーション待合室の隅々迄響き渡り、さしも尻車き我々も立ち上つた皆重さうに土産かゝへて……。點呼の時特に井伊家より御見送りを受け、金一封を頂戴した。諸先輩の御見送りを受けてブラットフォームに出た。出發の時は來たのだ、さらば帝都よ、憧れの都よ、いざさらば幸あれ！

十一時——發車のベルは鳴り渡つた。先輩諸氏も別れを告げて歸途の第一歩を踏み出した。窓にうつる帝都のイルミネーションも淋しく眺めて。ア、今晚も満員——これぢあ到底眠れさうにもない。噫。

第四學年修學旅行記

澤 效 一

五月十二日 (第一日)

昨夜からの天気を氣づかつて居たが、今朝なる暴雨の名残がたゞなほ雲となつて近江の山並を覆つてゐる。すがすがしい雨後の朝日が車窓に射しこんで来る。初夏の新緑は行手にみづみづしい色彩をなして先づ我等の旅を迎へてくれた。皐月十二日午前七時彦根を出發して京都の驛に着いたのは九時半であつた。

京都から南に廻るころは暑ぼつたい陽の光が初夏の雲を通して照りつけた。赤土の宇治の茶畑には籐を張り覆つてゐる人等を見た。遙かに南へ走つてゐる薄紫に煙つた鈴鹿山脈と並行に流れてゐる木津川はうねりうねつて白い憂鬱な光を見せてゐた。奈良に着く。後の青々とした三笠山の松並、麓邊にうづくまつた奈良の町はさすがに古の美術の源泉地たることを想はせる。此處で汽車を乗換へて十一時四十分發、又南へ向ふ。いよゝ大和平野へこなだれ込む。京終さいふ驛こゝが京のはてなのだらう。帶解、樺本、丹波市、長柄こんな驛を過ぐる時あたりの麥畑を越して遠くが靄に霞んでゐるのを見た。

客は非常に多い。さこの宿屋に行つても満員らしい。別に娛樂機關がないものだから歩くのが仕事だ。夜の九時頃になるミ夜霧がしつこり降りて来る。さすがに郷愁を覺ゆるものだ。さて我々は吉野へ來たが多くは櫻を忘れ勝ちであつた。五月十三日 (第二日)

昨夜の寝不足で今朝の霧が非常に氣持よい。夜のうちのあの豪雨の爲に満山は霧に包まれてしまつた。開放たれた室の窓を通る霧の小流が我々の體をしつこりこさせた。雨も晴れて幸福だつた。

元氣のいい我々は早朝から名所見學をする。「金峯山寺」前にくゞつて來た黒門がこの寺の總門である。昔は山伏の據つた所で建武時代の僧侶の勢力さいふものが想はれる。今は無くなつたが村上義光が此處の仁王門の樓上で屠腹したのである。「吉野皇居趾」遙に河内の金剛山を望むこゝが出来る僅かな土地でこゝに後村上、後醍醐、長慶、後龜山の四帝が皇居なされたのかと思ふ誠に畏れおほい次第である。

「藏王堂」から「吉水神社」、中の千本の中をくゞつて五六町櫻の樹の間に「如意輪堂寺」がある。かへらじ……の歌の扉は寶物の中におさまつてゐる。「後醍醐帝陵」を拜し「山口神社」に至る。靜御前が夫をしのびて舞を演じたころである。今日は朝からうす曇つてゐるので山行には心地がよい山を降るミ電車で高野に向ふ。吉野發午前十一時十分。

午後一時橿原神宮に參拜する。正午さがりの陽は随分暑い電車は一杯の人である。土地がやゝ丘陵地になつてくるミ電車は大變に揺れた。壺坂山、市尾、葛をすぎて吉野口に着く大分疲れて來たやうだ。吉野川の清い流れに沿つて山路は上つて行つた。しかし山路さいつても自動車の通る山路だ。強カーブを警笛鳴らしながら走り降りる自動車にいくさも遇つた。吉野神宮參拜。此處で少時休憩。これからが櫻の吉野山に這入るのである。口の千本は道の片方にはるかに谷の底へミ續いてゐる。しらべて見るミ所謂吉野櫻さいふがなかにも色々種類の變つたのがある。雲井櫻、布引櫻、白瀧櫻、關屋櫻、彼岸櫻等。

吉野の町はこゝらへ來るミ山はかなり深い。兩側には急な谷が落込んで居て、さころさころ杉の森が見える。谷一つへだてた向ひの山はすぐ手近に迫つてゐるので人々の視覺が妙な感じを起さしめる。大橋さいふ水の無い小橋を渡るこゝろが此處の町の入口である。橋畔に茶店が擴つてゐる。變な女に遇つたりする。黒門をくゞつて辰巳館さいふ宿屋についたのが午後四時頃である。我等にあてられた室は東の溪に面してゐて高い崖の上に立つて居るやうである。赤い夕陽が西の方の窓から室を明くして居た。皆んなの者は凝つミはしてゐない。遊びに歩くのが嬉しいものだから。夕飯がすんで散歩に出かけて見るミ町は賑かだ。灯の多い町だと思つた。旅行

電車は赤土の丘陵地を揺れて行つた。段々畑で大抵は麥が生えてゐる。短いなりに種が出てゐるからおほかた瘦地なんだらう。橋本さいふ驛で電車を乗換へして、學文路、九度山それから高野下驛に着く。かなりな山奥である。川沿ひに並び建つてゐる家のうちには西洋建が目につく。一寸西洋の山村のやうな感じだ。村の中はさから、もう徑は坂になつてゐる。一本二錢か五錢の杖を買ふのである。徑は傾斜の急な山の肌をまがりくねつて非常な坂である。さこかでケーブルカーの音を聞く。約一里程上りつめてくるミ、このあたりは大檜がしんしん空に立つて何十年かの物語をかはしてゐる身ぬちの汗も山氣にひいやりミして來て疲れさへ忘れる。追眞言宗の靈山だけにすがすがしが甦つて來る。女人堂で一憩するのが普通である。福智院さいふこれは近江人の詰所ミなつてゐる。五時半頃に着く。我々は疲れが甚しい。夜も遊びに出る者もないであらう。大變寒くなつた。

海拔三千尺大樹のうれを馳りすぐ雲たちまちに消去りにけり。

◆

大嶋善太郎

第三日 (五月十四日)

この清らかな尊い高野のお山に一夜の夢を結んだ我々は昨日の疲勞も何處へやら早朝覚の水の音に眼を覺まし澄み切つ

た新鮮な山の氣に浴びながら精進料理の御馳走を頂いて、直ちに山内見學のため宿坊福智院を出た。案内の難僧に導びかれて緑色濃い杉の間を通り、先づ眞言宗總本山金剛峰寺に参拜する案内を乞ひて寺内を拜觀す。數多の古名畫に接し又豊臣秀次自決の間なる柳の間を見て此處を辭して金堂に至る。入りてその内陣の結構の壯麗なるに驚きしばし立ち去るを欲しなかつた。それより直ちに根本大塔、三鈷の松を過ぎて大門に至る。兩側の金剛力士に睨みつけられてこゝを去り多くの宿坊寺院を過ぎ、樹間を通り漸くにして刈萱堂に達し、かの刈萱道心父子の哀れなる物語を胸に浮べて昔を思ひ、樹木鬱蒼たる中を一同石疊をふんで黙々として行く。

暫く行くに大名小名の墓が兩側に現れた。進むに随ひ行くにつれその數は増すばかり右顧左眄案内難僧の説明も一々耳に入らず唯々宗教の偉大さ尊さを深く感じて道を急ぐ。途中彦根井伊家の墓所を左に探し當てた。一の橋中の橋を渡り御廟橋を過ぎ石段を上り奥の院に参拜。遠く昔の偉人學者宗教家にして藝術家たりし弘法大師を偲び、燈籠堂に入り此處にて暫時休憩。時正に十時。

足を返して歸路につき途中不思議なる蛇柳を見靈寶館附近にて各自晝食。十一時半集合。下山の途につく。左に曲り右に折れ、不思議の山尊い山高野に別れを告げ二時半にして下山。昨日の上りに引きかへて今日の足の早さ。二時八分高野

べくは無關心でありたいものだ。

十二時點呼。修學旅行最後の夢を結んだ。我等の脳中には三日間の旅、あれからこれへ走馬燈のやうにまわつてゐる明日。明日は電氣博の見學だ、もう一日である。

◆

高 祖 保

五月十五日 (第四日)

草まぐら、旅空の心許なさがつら／＼旅空の身に沁みわたる。早や旅に出て今日四日目の日がきた。……ちら／＼何か眼前三三尺をちらつく。大阪の宿にこもる一夜、をつくりこくるまつた宿蒲團のうら／＼暖もりも、疲勞の身の旅心の思ひなしが早くさめ果てた頃、夜はしら／＼明けわたつた。朝食の箸を擱いて七時、朝日を踏んで大日館出立。

めい／＼電車なり徒歩なりで八時頃築港に着く。このほ／＼低い家並のごた／＼暑苦しげに群れたつた、一寸まあ場末じみたところである。築港は寒冷でしめやかで何だか簡素に云つた風の輪廓だらう。さびれ果てた——云つた感じが頗る深い。奇怪な抑揚に地方人の肺腑をして、うた／＼寒からしめる。小蒸汽船の汽笛のさみしさ。しんみり／＼静もつた汽船の群が、薄すら陰影を海のおこす。そんなさびしい景色を、大勢つながつて眺めてゐた。

九時、電氣博覽會第一會場着。けば／＼しい色彩で色づつ

下發大阪に向ふ。

高野下を發した電車は間もなく橋本に着く。此處より顧みれば高野山模糊の中にあり依々として我々を送るが如く見えた。車窓より眺むれば河内平野よく開け打ちつゞく春の畑には麥青々／＼伸びて遙につゞいてゐる。車中は見れば連日の疲れのためか安らかに夢を結んでゐるものも見受けられ電車は一路大阪に我等を運びつゝあるのである。大阪に近づくにつれ都會的色彩を増し旅する者の思ひなしが驛々で乗る人が皆神經質にこせついてゐるやうに見ゆる。兎角する内に未だ日も沈まぬ四時十分大阪難波の驛に着いた。

徒歩電車自動車行き交ふ街路、高樓肆鄰の間を過ぎ程近き日本橋の宿所大日館に着く。一同旅装を解き脚を伸ばしてほつ／＼一息ついた。夕食後外出を許され一日の疲れも打ち忘れて各自思ひ／＼の所に出かける。行くは何處か。千日前か道頓堀か。空は晴れてまた／＼星はこの夜の都を見つめて居る。店頭を飾る電燈空中高きイルミネーション。都の夜は全く不夜城である。街路を走る電車の軋る音、自動車の爆音、總てが活動であり、總てが競争である。

川上にうつる電燈の光り、或は電車の軋音、自動車の爆音總ての混雜喧騒を川水は何／＼聞き何／＼見てゐるだらうか。併しこの川水は恐らく無關心に流れて只うつるものはうつし聞くものは聞き見るものは見てゐるだけであらう。我等も成る／＼ふ。

本館には電線電路、通信機、原動機、電氣機械、照明機、絶縁材料等を飾り附けて、見物人が威壓され勝たぬ。交通館では鐵道沿線のパノラマの大きさ。動力館は名の如く本館と大同小異。別館また然り。それから参考館がある。統計とか圖書刊行物とか電氣器具に關してのや／＼こしいものに歴史的模型物。

實驗館、第二別館、例に依つて例の如く、目新らしいものはない。農事電化園に入ればや／＼物が主めく。農事電化の典型である。家庭電化館云ふのがある。家庭の電氣應用器具がズラリ／＼顔を並べてゐる。其他殖民館、外國館等では異國の特産的物品の電化が見られ、こにかく特殊な一脈の雰圍氣に浸される。美しい水晶塔が在る。餘興設備がある。奏樂堂有田洋行、矢野サアカス(一度彦根にも來たものだ)と思ふ)が腰をすえてゐる。其他賣店、高塔、メリイゴーランド、噴水、野外劇場がある。兎に角や／＼こしい内部ではある構へは思ひしに勝る大きさだ。

午食は館中におの／＼辨當を擴げる。食べつゝ噴水の水し

ぶきに吹かれゆけば、春ながら未だうすら寒い位であつた。さて退場して電車の人となる。

電車に小つびぎく揺られつゝ、館内の蓄音機を頭へ廻らしてみたりし乍らも、心の底を影こしらへて流れて行くものが在る。さうだ。心も身も物さみしい旅空にあつて、しつくり氣が落付かぬのも無理はなからう。併しあられない風物や憧憬の間に在つて、つたない頭腦を閃かしつゝ、眺むるのも亦一興ではないか。

次は朝日新聞社。渡邊橋に電車を捨てたは春の日も漸く中天をよぎつた午後の二時。直ちに社へ行く。讀賣新聞に源を發して、文明文化に向ふ世の必需品たる無二の報知器、新聞は今の世に多く存する。併し全國を大きく括つて讀者の多數を誇るは、朝日新聞に於いて恐らくはその右に出するものが無いだらう。その新聞社にお初にお目にかゝつて、懷しみ珍らしさ、限りなく湧く好奇の心を持つ。

細長い建物だ。階段が細くくねくね附いてゐるのが面白い。早くも輪轉機らしい凄しい音が立つ。活版の油くさい香り新聞紙の毎朝嗅ぐに等しい匂ひがこゝでもハタミ鼻頭を打つ植字の跡、活字拾らひ、見るもの皆おのが町の風物より大まかな感じがしてならない。高速度輪轉機が上の方で動く。朝日グラフ、朝日カメラ等はかくして生を得てゆくのだ。兎角うれしい様な心地もする。皆折重なつてそれ等を覗きつゝ、細

くて廣い新聞社をゾロリ／＼と行列する。社を辭して街路に流れ出る天地が忽ち擴がつてこゝろも底から伸びやかに伸びをする。

自由解散だ。あつて、各々蜘蛛の子を散らした如くなる。大阪は梅田驛を目あてにこゝ、數町の膝栗毛だ。春の空はをつり／＼曇りになつむらしい氣配である。梅田驛に待ち合せて直ちに車中の人となる。春季旅行の季節さき云ふ精か、大勢の旅行團にめぐり會ひ、旅情ます／＼穩かならざるものがある。

大阪は道に大きかつた。今去るに及んで坐る別れ難いおもひがある。思ひ返へせば感慨は深い。霧の海に葉櫻の海に、歴史も芳しい吉野辰巳館の一夜。或はクラシカルな桃源の一村である高野山福智院の一夜。さては昨夜の夢も未だ醒め果てぬ大阪の宿の一夜。……しかし併し、それらは既に寂しく四日の過去の裡にまたは長いこし方の裡にうもれ去つたではないか。事皆現實ならずして走馬燈の上に流れ去つてゆく一片の夢に他ならない。

よしと言ひあしと言はれつ浪華がたうきふし、け

き世をわたるかな

(白蓮)

さらば此處にうき歲月よ、大阪の地よ。去る、去る、私達は去つてゆく。さらば長かりし春期旅行よ、去りにし四日の日よ最う二度とおまへたちに巡り合はうこゝは恐らく無いだら

う。あゝ流轉だ、變異だ。世事心しけく天の雲、地の水と流れ去つてゆく。流れ去つて亦返り來ぬ歲月よ。今日大阪の地よ。せめては天月日の下に、地上流轉の上に、願はくばこゝしへに在れ、斯く。私は目をつむつた。

されば四日の間かけて、私達が辿つた土地の地の追想は忽ち眼前に行きつ戻りつして、去つては現れ、現れては去つてゆくが、何たる驚異ぞ。新しく眼界にうつる風物の動きと輝き。何たる珍奇ぞ。土地風物にかこまれて榮えゆく天賦の恵みと恵み。……今にして私はつくづく斯く思ひ、斯く感じたそして更に儚い人間萬歳の淡聲にうもれつゝ、おごそかに而もしづ／＼と過去の世界へ遠く歸つてゆくだらう。「春」を見無限の「時」の生命を感じた。

住めば都だ。彦根につけば永年住みなれた地の土は嬉しく懐しく、心より迎へてくれる凡ての物であつた。三々伍々々蔭の道を踏んで歸路につく。

大和の四日

居長英三郎

一日三日と如何にも疑を持つた天氣も、今朝は美しく晴れ淺みぎりの隅々まで明るい朝日が漲つてゐる。丁度我々の出

發を見送つてゞもくれるやうに。服裝さいつても常と變つたこゝも無く、流石に小學時代のやうな喜びも無い。もう此の頃になれば太陽の熱は夏らしくなつてゐるが、地上はまだ裸のまゝで轉つてゐる。併し八幡邊へ來る一帯に淡紅色の蓮華草が咲いてゐる。

低み空近江路がすか縁ふく

京都で乗換へ、奈良近くなる一休に竹が多く、又畑にはもう二尺余りの青麥が遙か遠くまで擴つてゐる。裸の土の姿は見るこゝも出來ぬ。さうした青麥畑の果に何さいふ山脈だらうか、くつきり濃い輪廓を持つて、美しい曲線を描いてゐる。そしてそれも皆青である。

高み低み野は初夏を山青し

さみぎりや子は仰ぎ見ぬ照りにけり

長い／＼山鳥の尾なんかの比でも無い。大方木津川の堤でもあらう。長い堤と並行して走つて行く。晝近い太陽は靜かな光を展べて輝しい緑が到る所にきらめいてゐる。奈良へ正午頃着いた。併し短縮された我々の豫定表には此の床しい香のする古都へ降り立つて一瞥を與へる時間をだに書き込んでゐない。僅に汽車の窓からそれ知らるゝ興福寺の塔を望見して、このまだ知らぬ古都に別れた。

眞晝頃畝傍へ着いた。驛から相當の道程を丁度照りしきる日の中を、昨年の旅の香氣さを今更のやうに思ひ起して、そ

れでも命ぜられる儘にきちん列んで歩く。實際去年の舞鶴要港部へ歩いたのを思はせて而も雲泥の差がある。

大和の三山は靜に同じやうに伏して居る。流石に畝傍御陵樞原神宮は數きつめた白砂も清く、おひ繁る松は常盤に綠床しく、搖ぐこなき皇祖御發祥の地として過去三千年の大歴史の尊嚴を未來永劫の御陵威に輝いて早くも鳴きしきる蟬に森然としてゐる。襟を揃へ塵を拂つて伏しおろがみ終つて電車の人となる。

二時間余りを立ちつゞけて吉野川の清う流れる芳山の麓へ達した。ほんの少しの余地をも残さず、櫻の苗木や麥をせ、こましく植ゐた吉野山を、少しづつ減つてゆく路標を頼みに喘ぎ喘ぎ登る。吉野は良く言へば大變開けた、悪く言へば俗化し切つた町である。墮落した一面のみを取り入れたのかと思ふ程その幽玄さを失つた所である。彼等の生活がさうさせるのかも知れぬが、打並んだ賣店等の女の墮落性を帯びた圖々しさには全く喫驚せざるを得ない。勿論宿泊料といふ點もあるだらうが宿は相當に氣持の良くない陰氣な家である。夜九時迄の外出も大抵は八時頃に引揚げたらしい。併し狭い室の中でむし暑いのも、例によつての騒で、殆んど安眠は出来ぬ。枕下の障子をあけるも、靜まり切つた街から軽い霞が軒をくぐる。

もう四時にもなるも皆起き出した。自分も五時頃のつもり

で起き上る。冷たい山氣が心持よく眼をさます。四邊は全くの霧である。すつと下の方の谷からでもあらう。かすかな音を立て乍らじり峰の方へ這上つて来る。櫻であらう二三本、彼方の山の尾上にかすんでゐる。黒々しい山の肌が見えつ隠れつ如何にも壯哉である。

山狭に霧白みく昇りて行くも

三芳野は櫻がすみて朝霧ふかみ

山黒し朝霧靜みま白くのほる

霧草みつきり消えつ山朝ほらけ

總てが豫定以上に早く進んで、皆氣の早い連中ばかり、朝の自由外出でもなく、又全然歸途につくでもなく、ぞろ／＼と教師を置き去りにして出發する。

藏王堂、吉永神社等昨日から何度も行つた所は、その上詳しくも見ず如意輪寺へ行く。途中櫻が多く、霧は段々うすらんで行く。只櫻の梢々にほんのり残つてゐる。如意輪寺で教師と一緒に立つた。

霧ひや、吉野櫻の朝哉

如意輪寺で飯りには又吉永神社で寶物を拜觀して、只自分の好奇心を躍らせる。案内人の機械的な暗記力に大きい興味を起す。もし彼等が試験を受ければ全く天才的才能を發揮するだらう。

迂廻し迂廻する山道を巧に乗りこなす運轉振りに感心し乍

ら、上り程に退屈もせず山を下りた。汽車の都合で一時間餘待つて全くの寒村に閉口する。橋本迄の汽車は近鐵に似て、上下左右縦横自在に揺れて黒々しい煤煙が、いやが上に汚い列車を穢す。途中では鐵道に添ふ道の自動車の快速力に幼児のやうな心をおどらせる。橋本で再び電車に換へ高野へ向ふ

紫は桐の花なり曇り空

青深み吉野河原や眞日白し

停留所からもう爪先上りである。宿の乏しい辨當のみで晝食を済した自分は、漸く空腹の爲に先頭から殿になつてしまつた。ラムネのラッパ飲みで元氣を出し乍ら、ふら／＼上る中にも、もう地獄の門を覗きかけて居る婆さんが、こつ／＼と登るのを見て餘りにもその信念の強いのに驚く。上るにつれて増加する癩患先生の人間離れのした面相には、彼等の生活を想ひ、癩病亡國を思ひ、そして高野再び登らざることを固く思ふ。併しこんな悪感も一度女人堂を過ることもう次に下る迄は、大脳の中から姿を消してゐる。それ程に高野は山上の平地に發達して、案外に整つた町である。そして殆んど山上に居ると思はぬ程廣い平面である。十時迄の外出を宿坊を出て町の一隅をぶら着く。今夜も可成り騒々しかつたが隣客の一喝に沈黙。佛法僧の聲も聞えぬ。

朝は冷い。水も清い。吉野程猛烈でないが、杉木立の間には霧が軽く屯する。

朝霧や高野すゞしも杉木立

此處でも案内人の聲も、多くの伽藍に興する。奥の院へ詣でる。墓の大きく多いこと、見物人參詣人にあらず——の多いこと、そしてその間を囀る案内人の聲のや／＼こしいこと等うっかりする内に「佛の顔も三度」なんぞか説法されてしまつた。

二時過ぎ山を下り大阪へ一氣に走る。始めて見る大都會の見まぐるしさ。却つて五月蠅い。十一時迄自由行動を許される。今夜の騒も猛烈だつたが、併し別室に居たので案外樂だつた。

翌日は樂港の博覽會に、極く通俗的な部分にのみ興味を覺ゆる。朝日新聞の見學もや／＼に、二時梅田を出て京迄無停車で走る。

松並木 鮮人街道夕日うすくも

遠山は照りたり近く野はく／＼



部 報

七四

西村 敏三(二年) 夏川孝太郎(二年)
作文之部

一 等 名畑 榮一(五年)
二 等 西澤 興作(五年)
小玉 隆雄(四年) 高祖 保(三年)

那須 凌岳(二年) 堀江 耕次(四年)
三 等 茶木伊三郎(一年)

河村 純一(二年) 堀江 耕次(四年)
英習字之部

一 等 池田 文中(二年)

二 等 上野 正(二年)

三 等 瀧澤 秋三(二年) 保坂 忠吉(二年)

中島 治(二年) 前川 三郎(二年)

學藝大會(辯論大要)

大正十五年十月十六日

1 開會の辭 委員 山本 捨三君

部長の挨拶に次いで悠々登壇喝采裡に開口一番好口調を以て信念に基づき熱烈なる生命力を有する辯論の何たるかを説き辭に代ふ
2 眞の勝利 一年 北村 清君

圖 畫 之 部

一 等 三原 文雄(四年)

松宮 重次(四年) 中川 正作(二年)

永田 三男(二年) 吉原 定藏(一年)

二 等 平野 等(四年)

小林英太郎(四年) 百々増次郎(四年)

中島 昭(三年) 木村 六郎(三年)

學藝品展覽會

大正十五年二月十一日紀元節を卜し我々校學藝品展覽會を開く、例年の通り圖畫習字が主であつた。

入賞者を示せば左の通り

習 字 之 部

一 等 宮尾 義之(一年)

山口 彌平(二年)

二 等 前川 三郎(二年)

安部 直智(二年)

三 等 小椋 一道(一年)

澤 効一(三年)

圓城 治平(二年)

好音調を以て宮本武蔵の銀道から、巧に結論に及ぶ。其の落付ける態度や其の眞の勝利は困難に打ち克つことなりと。

3 吾等は如何にすべきか? 二年 鈴木 勲君

姿勢音調共によし、古來種々の偉人の故事を掲げ、智能啓蒙の要、立志の尊重すべきを云ひ、吾人の取るべき道を悠々として説く
4 努力と奮闘が青年の生命 五年 北村 秀康君

重々しき聲で努力奮闘の缺くべからざるを述べ人間の慾望を満すべき努力を説き、虚偽の生存上必要な言ひ、古聖人の教訓と時世の關係を説き、努力と奮闘は現代青年の生命なりと結ぶ。

5 ハーモニカ獨奏(カルメン)

三年 中島 治君

6 此の事實を帝國青年に告ぐ 四年 大中 威雄君

態度口調其し、レーニン派の政策の誤れるを説き、流血の惨なかりしムツソリニの革命を説き、赤色思想復讐的感情なり、日本國民たるもの遂に起つて彼等を驅逐せざるべからずと。

7 The lion and the rat 二年 安部 洋君

8 物質を偏重する勿れ 五年 栗田 春雄君

低音惜しむ可し。 二年 藤野 知三君

9 心醉を戒む 四年 東 清哲君

10 涙について 一年 椋田 正三君

11 困 苦 二年 柏淵 正也君

12 自から助くる者 二年 居長英三郎君

落付ける態度、原稿に議論の核心を掴み得ない。

13 價値の考察 四年 久米 孝男君

14 萬里の波瀾を超えて雄飛せよ 三年 芳樹君

日本はアジアの防波堤なり、吾人は海外に雄飛せざるべからず。人口問題、原料、食料問題の解決策として、徳川鎖國政策の情勢を破り、國家の要求、必要を充し、自己の發展の爲海外に活動せよ。

15 空中戦争 二年 廣瀬 芳樹君

口調流暢、活潑の如し、もう少しの修養を望む、佛國民間飛行士ギヤロア氏が歐洲大戰に祖國の爲、ツエッペリン飛行船と戦ひ、立

派に最後を遂げたといふ御話、
16 地球の内部と人間の内部 四年 澤 効一君

態度口調すこぶるよし、天文學の發達と地震學のそれと比し、更に生活に關係ある地震學の發達を要するを述べ、天文學の發達は人類の眼に常にある故なりと。人類の長所として且短所として、自分自身を忘れてある人間の餘りに多いことを嘆き、所謂「自己本體主義を説く。
17 合 唱

1. What found we have Jesus 五年 本山 徹君

2. Mass's in the cold ground 五年 木村 六郎君

18 聖なる國體 五年 知月 義一君

明瞭! 恐れしめよ、恐れらるゝを誇らせよ 確固たる政治組織は古聖人も宗教も之を要す

19 農村の都會化 四年 宮川宇右衛門君
態度に口調可なり且眞銀味あり、都會化に善惡二種即ち善き文明の輸入と虚榮的なかぶれ前者喜ぶべし後者卑しむべし。農村にして耕作を忘れんか、食糧問題は全く危殆に瀕せ

て勝を制した。午後に至つて第二回戦となる
我軍の意氣益々盛なる。

本 校 舞鶴中學

×小野與惣治

○大平太一郎

○山本 捨三

山原 義雄

○小川萬喜太郎

我軍勝ちたり、又勝ちたり。折しも大空よ
りは轟く雷雨來たりて今日の物凄き戦場。我
軍明日を期して一度館に歸れり。

七月二十七日 火曜日雨

第三回戦として熊本商業と戦ふ。

本 校 熊本商業

×小野與惣治

大平太一郎

○山本 捨三

○山原 義雄

小川萬喜太郎

正清 清

○山本 捨三

田河 吉雄

○山原 義雄

○小川萬喜太郎

何といふ無慘であらう。遂に敗れた。刀は
折れた。力つきたさいふにはあられど鎧は破
れた。涙を以て敵に勝をゆづるのみ。されど
戦は永久に續けられる何ぞ力を落してやまざ
らん。

終に應援諸君の熱誠なる御後援を厚く感謝
す次第であります。

滋賀縣教育會主催

第十一回武道大會の記

金亀城頭の木々黄金に彩られ颯々の秋聲敗
荷より出づるの秋、我等劍道部選手は天津商
業に於て開かれし滋賀縣教育會主催第十一回
武道大會に出演せり。炎熱金鐵をも溶かす嚴
暑にも屈せず、縣下の雄を我が蹄の下伏に
せんものさ猛練習を續け時機の到來するを待
ちぬ。時は十月三日我等選手は堅き自信を抱
きて、多數の寄宿舎生諸君の熱誠なる御後援
の下に、午前六時の汽車にて、金亀城を後に
大津に向ひぬ。今其の戦績を報ぜん

第一回戦

比叡山中學

○西 村

加 藤

遠 藤

高 士

○長 道

本 校

彦根商業

第二回戦

本 校

小 野

大 平

山 本

山 原

小 川

富 江

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

第三回戦

本 校

○小 野

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

こゝに到りて最強敵八商は四回戦の結果十六
點を獲得せり。我校第四回戦に全勝せば本日
の月桂冠は當然我が校のものなり。選手の意
氣其極に達す。

第四回戦

大津商業

○小 野

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

○小 川

○大 平

○山 本

○山 原

惜しいかな、日頃鍛へし秘術を盡せしも其

効空しく、我校は一點の差にて、月桂冠は八
商の手に歸じたり。我校選手涙を飲んで退く

大正十五年十一月十三日

行幸啓記念武道大會之記

一、二、三年級紅白試合

紅

白

○田 中

○伊 藤

○重 藤

○小 堀

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

坂 枝

持 林

羅 尾

世 深

同 舟

同 花

同 木

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

久 馬

松 田

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

同 崎

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○同

○副將須山	副將知田
◎同	大將姉川
不戰大將三原	
紅軍の勝利	
○三原	須山
同	木村(善)○

尙本日は武道奨励のため諸先生の模範試合が行はれた。

(杉本先生)	(寺田先生)	(倉橋先生)
(夏原先生)	(森脇先生)	(松永先生)
(野間先生)	(夏原先生)	(足立先生)
(松永先生)	(森脇先生)	(夏原先生)

本日の入賞者左の如し

九點	三年	天方	修二
六點	四年	木村	龍善
同	二年	室谷	秀次
同	二年	吉見	東三
五點	二年	廣岡	宗隆
同	四年	佐野	重次
同	一年	舟崎	孝誠
四點	四年	筒川	敏夫
同	二年	吉村	茂三
同	二年	花田	逸朗
同	三年	河西	尙武

八一

白軍の勝利

○前川(修)

四、五年級紅白試合

中	島	中	岡田	西村(次)	同	同	高橋	高城	同	同	小菅	同	同	伊居	藤村	奥村	同	筒井	同	同
黒谷	道	北村(音)	同	同	同	竹	同	同	同	安澤	同	近藤	東田	原田	同	同	同	同	同	黒谷

外來選手對本校選手のメンバー及結果

○彦小	田中 正造君
○彦小	眞野 寂順
○彦小	丸井 啓二君
○彦小	西依 翼夫
○彦小	梅本 善雄君
○彦小	集治政太郎
○彦小	大平太一郎
○彦小	平居 忠彦君
○彦小	山口 彌平
○彦小	小野 福壽君
○彦小	山本 捨三
○彦小	東城 貢君
○彦小	集治政太郎
○彦小	辻 秀次郎君
○彦小	澤 健藏君
○彦小	木村 効一
○彦小	澤 健藏君
○彦小	野瀬 光三君
○彦小	小野 與次郎
○彦小	山本 捨三
○彦小	淺野 辰造君
○彦小	菅井 昌夫君
○彦小	小野 與次郎
○彦小	大谷公之助君
○彦小	小川萬喜太郎
○彦小	野瀬 光三君
○彦小	山原 義雄

第三回近府縣中等學校
劍道大會參加記

十一月十四日彦根高等商業學校道場に於ける吾等選手の最後の奮戦力闘や次の如し。
第一回戦 ○本校——栗田農學
大將副將を凌ぎ悠々去年の怨敵栗農を殲す
第二回戦 不戦一勝
第三回戦 本校——○平安中學
あゝ、惜しい哉。時未だ至らずして、我軍終に洛陽の雄平安に敗る。

柔 道 部

本年度始めて花田先生が武術部長にお成り下され、毎日々々柔道に視に來て我々選手を勵まして下さつた事を、選手一同非常な歡びを致して居ります。

七月十八日 岐阜に遠征岐阜道場にて岐阜及び岐商と戦ふ。戦跡

本校	岐 中
渡 邊	渡 邊
廣 瀬	中 原

○西村	棚 橋
古 川	大 野
奥 居	辻 藤
長谷川	後 藤
本校	岐 商
榊 原	名 田
古 川	杉 山
奥 居	中 田
渡 邊	和 田
廣 瀬	長谷川
長谷川	和 田
西 村	(忘 失)

此の試合にも破れたが良き経験を得た。

大正十五年七月二十八日

武德殿出演之記

二十六日迄先輩種村羽村羽田西澤諸氏が練習に來て下された事を感謝致します。

○甲府中 尾澤 林造
○本校 渡邊祥次郎

大正十五年十月三日縣教育會主催
第十一回武道大會出演之記

第一回戦

本校	膳所中學
榊 原	八 木
田 中	堀 池
古 川	樹 下
西 村	奥 村
長谷川	岡 田(初段)

第二回戦

本校	虎姫中學
榊 原	林 川
田 中	角 川
古 川	北 川
西 村	吉 川(初段)
長谷川	前 田(初段)

第三回戦

本校	栗田農學
榊 原	中 尾
田 中	玉 谷
古 川	吉 川
西 村	宇 野
長谷川	立 川

第四回戦

本校	八幡商業
榊 原	坂 口
田 中	中 島
古 川	小 川
西 村	古 谷
長谷川	脇 脇

全點二十點中八點の得點昨年比して真きも未だ未熟だ來る年の奮闘を望む

十一月二十一日

彦根高商柔道大會出演之記

第一回戦京二商と戦ひ古川二人勝ち三人目に引分け、廣瀬敵の副將と戦ひて惜しくも破れ、渡邊敵の副將を倒して敵の大將に破らる長谷川敵の大將と戦ひて得意の巴投にて我々西村大將を凌ぎ第一回戦に勝てり。
第二回戦抽籤により岐阜中學と當りしも、岐中棄權して第三回戦に入れり。
三回長濱農學と對戦せしも二段初段三人一級一人の相手なれば涙を吞みて破れたり。
(長谷川銳吉記)

第一日終つて第二日對校試合出演の爲我等五人は腕をさすつて待つて居た。
本校 大谷中
榊原 重吉 × 久保 秀春
奥居俊一郎 × 森金 速映
渡邊祥次郎 × 村田鐵男(初段)
西村榮次郎 × 早瀬久彌(初段)
長谷川銳吉 × 清水清一(初段)
渡邊得意の左巻込にて將に敵を倒さんとしたれど惜しくも逃す、西村長く戦ひしも、敵の巴投に遂に破る。長谷川大將とて敵に肉迫すれども、初段なる相手に敵する事を得ず引分けとなる然し我軍は真く戦ひし事を公言しても良いと思ふ。

行幸啓記念武道大會柔道年級
紅白試合の記

紅軍
白軍

中村(繁)	夏原	同	同	同	同	同	川崎	同	同	同	同	竹林	大辻	上杉	小財	北川(吉)	山本(喜)	日夏	西澤	廣田	同	同	同	同
							×											×		×				
同	同	吉川(光)	池田(文)	岡庭	川口	平野	三角輪	藤田	西川(忠)	田村	同	同	同	同	同	同	大照	同	家森	同	園田	山田	吉田(穰)	澤村
○	○	○															○		○		○			

中	百	同	○夏川(省)	組	大森(久)	同	○松岡	同	○同	○圓城	大森(祐)	兒	外	大	西	北川(孫)	同	○同	○近	北	平	藤	岩
野	々			田			岡			城		玉	村	西	田				藤	村	塚	田	崎
				×		×		×									×			×		×	
同	同	上	若	同	平	大	中村(利)	尾	森	同	同	同	同	同	同	岡	末	淺	加	同	大	同	同
○	○	○	林	山	○	川	橋	崎				○	○	○	○	○	村	松	利	藤	塚	○	○

○同	○同	○安	○同	○内	長	同	○吉川(文)	目加田	小財(九)	力石	同	○同	○同	○同	○同	○横	同	○前	同	○同	○林	野村(真)	河村
		居		片	野		(文)	田	(九)	石						田		川				(真)	村
					×	×					×						×		×				
多	武	同	古	清水(伍)	西	津	同	同	同	廣	西	五十	西	長	西	奥	吉	野	有	植	同	同	同
賀	田		澤	(伍)	村	田				田	川	嵐	川(源)	谷	山	川(造)	村(清)	川	田(義)				

同	尾本	副將織田
竹岡	×	同
大將清水	○	
野	×	同
不戰副將大竹		
大將南城		
四、五年合併紅白勝負		
紅軍		白軍
川村	藤田	
○家森	同	
同	北川(彦)	○
○河合	同	
○同	田中(信)	
同	不破	○
○吉居	同	
同	北角	○
清水	×	同
目加田	末	松
居長	同	○
澤田	同	
同	岡庭	
本池	×	馬淵義
大橋(富)	寺村	○
八五		

[illegible]

外來選手對本校選手三本勝負午後開始
の後開始

因に言ふ本年度より水上大會を校友會端艇部大會と改稱せり。

尙本年の記録なき爲タイム等は不明なり

端艇部報 (大正十五年度)

(本多一男記)

三年	四年
清水悟位太	三原文雄
大竹徹治	北村彌一
辻村軍左右	江龍謙二

本校創立記念日水上大會之記

例年の如く本校創立記念水上大會は五月一日大洞内湖に於て舉行せらるゝ事とせられり。午前八時開會進行良久午後四時無事終了。年級レースは五年級の勝に歸す。泰公團、大津商業、彦根高商の参加ありて當大會に一層の光輝を添へたり。

昨年八月森主將以下の第一選手解散以後本年度に入りても我が部は其の名のみ存して一人の選手だに無し。第二學期の始に至り大阪堂島の大會あり、五月一日の水上大會以後に於て部長、理事等の盡力により再び選手編成に取りかゝれり。五月二十七日始めて第一選手を編成せり。昨年度森主將の幕下に走せ參ぜし原田、西川の二重鎮を始め昨年度第二選手に加はりて石場ケ濱に憤死せる杉本、江畑安澤の精銳を交へ、加ふるに元氣潑洩たる新進江龍を以て、永年振はざりし彦中端艇部をして再び天下の覇者たらしむべく奮然として起てり。時しも彦根高商の水上大會は目前に迫り、我等も當理に開かるゝ大會なれば是非出漕し、たさび敗るゝも彦中健兒の意氣を示さんものと、二十八日より練習を開始せり。五月下旬の事なれば湖上波高く、正確なる漕法をも研究する事不可能なりしが、天候靜穩なる日の外はバック臺にて練習を積めり。

八七

かくして我等の戦ふべき大會は日一日と切迫せり。

彦根高商水上大會出漕之記

選手編成以後旬餘にして彦根高商第二回水上大會は長曾根湖岸に於て開催されたり。我が部第一選手は練習日未だ淺けれども必勝を期して之に参加せり。

六月六日幸にも天麗らゝかにして微風だに無し。午前九時會場に集合す。豫定より遅るゝ事二時間。午後二時我等は斯界の豪強諸師範奉公團及び往年其の名高かりし湖南の雄藩所中學と争ふ事なれり。時しも微風徐に湖上を吹きて小波起りたり。雖もグットコンデイションなり。二時過に至りて勝中棄權と決じ我々奉公團二校のみ争ふ事と成れり。二艇美事なりエートを終へてランチに引かれてスタートに向ふ。彼體格我に勝り、其の面に自信の色を表せり。スタートに著くや俄然一發火蓋は切られぬ、敵のすべり出し其くスタートに於て我を抜く事一艇身。我遅れじと力漕して之を追ふ、彼もさる者益々力漕し彼我の距離三艇身餘りなり其のまゝミッドルを過ぐ

舵手此處ぞこはかりミッドルへビ！を絶叫すれども如何せん、彼益々先んじ抜く事能はずかくして敵に勝る事五艇身にしてゴールに入る。吾等は敗れたり。二度此の大會に敗れり。嗚呼！何たる恨事ぞや。校友諸君の御宥恕を乞ふ。

因に本校出漕者左の如し。

舵手	安澤松兵衛
整調	本多一男
五番	江畑助雄
四番	原田富藏
三番	西川佐平
二番	北村彌一

(江畑病氣の爲補欠として出場す)

艇軸 杉本直三

但し奉公團は當大會に優勝せり

長濱農學校水上大會參加之記

彦根高商の大會に於て一撃の下に破られし我等は其の後第二選手とも編成し共に湖上に愛艇を浮べて来る日の勝利を夢みつゝ、練習を積めり六月十九日長農の招に應じて彼の地に遠征することとなり、放課後夏原先生引率の許

に彦根を出發す。午後四時八幡商業と戦ふ。

赤 彦根中學 (第一コース) 一着 六分三秒

白 八幡商業 (第三コース) 二着

吾等艇として試漕するに艇重くオールも甚だ抜ひ難し。豫定の時は来りぬ。二艇型の如くサリエートを終へてスタートに着けり。號砲一發二艇等しく滑り出づ。一進一退我々ピッチを上げて進めば彼又是に應じ我々ストロークに出づれば彼又應ず。敵ながら舵手の手腕に感服す、我は千百のコースに未だ慣れずミッドルに至りて其の力大半は盡き艇速衰ふ。敵是を氣附しか急調もて一艇身を先んず。吾も彦中健兒なりなに冀さピッチを上げて之を追ふ、八百九百のポールも過ぎ愈々ラストに入る。舵手ラストへビ！を絶叫するや我が艇の滑り益々其く彼我雁行す。後十本と叫ばるゝや我獨特の作戦に出づ敵もさる者急調にて進む。ズドンと一發白煙はあがれり噫！

我等は勝てり。敵半艇身を遅れてゴールに入る。かくして我等は花環を得て午後六時歸彦す。校友諸兄の御後援を感謝す。

因に本校出漕選手左の如し

舵手 安澤松兵衛

整調	本多一男
五番	江畑助雄
四番	原田富藏
三番	西川佐平
二番	江龍謙二
艇軸	杉本直三

夏季練習之記

長農水上大會以後我等は来るべき八月一日の晴の舞臺に登場し、此の衰微の傾ある我が彦中端艇部をして、今年こそは清き歴史に一輪の花を添へ名實共に赫々たるを得しめん、と猛練習を開始せり。我等は唯目指す所は只真紅の旗——榮譽ある優勝旗をして再び金魚城頭高くなびかせん事のみ。炎威熾々天焼け地焦け水潤るゝるの時日々怒濤と戦ひ、或は多景島にロングを引き、或は定コースを引き、より以上の漕法より以上の耐久力を加へんと努力せり。或時は第二選手と共に競漕し一秒なりともタイムの上を見れば言ひ知れぬ喜悅を感じ、下れば尙一層の努力を爲し、オールを握る手は破れオールに生々しき血痕すらも着きたり。風波強ければバック臺上の人となり百本二百本力の有らむ限り精の續くかぎ

大津石場ヶ濱出演之記

七月二十八日午前六時我等七勇士は西先生を初め第二選手の熱誠なる萬歳の聲に送られ必勝を期して出發せり。我等の心中果して如何必す勝たん死すとも負けじ勝たずば二度と歸

り死して後止むの意氣を以て練習に餘念なかりき。六月七月と月日は流れ七月も半ば過ぎ暑中休暇は来れり。愈々我等の活動期は目前に迫りぬ。我等は競艇に慣るべく彦根高商の艇を借り受け、校友の樂しき家庭に急ぐをも意に介せず、日毎愛艇を浮べて奮闘し、汗と涙にまみれつゝ、赤銅色に變じた腕、彦中魂のこもれる此の腕に母校の名譽は懸れり、いざ戦はん。七名が一團となりて當らん。然らば如何なる敵をも打破る事を得んと言ふに叫び日西山に没し行交ふ船も影をひそめ淋しき湖上に波と鳴を友として懐かしき艇庫に愛艇を運ぶ時、宵の静けさを破る七時の鐘が淋しく傳はり来るが常なりき。かくして我等の腕には自信一日々々高まれり。幸ひ本年は病者も無く七月二十七日僅るゝ長曾根波止場の練習を打ち切り大津を指して駒を進めたり。

第三回

丸龜中學第一選手	一コース 青
彦根中學第一選手	二コース 白
米子中學第一選手	三コース 赤

かくて第一選手は第一回戦に於て三ヶ年優勝の榮を荷ひし常勝軍米子及び四國の豪にして本年宇中が丸龜かと言はれし丸龜と戦ふ事に

決せり、番組発表せらるゝ、や満場拍手し其の響しばこの間止まざりき。敵我が大なりとも恐れず勇を鼓して戦はん哉。續いて第二選手の發表あり。

第十三回

米子中學第二選手 一コース 青
彦根中學第二選手 二コース 白

其の結果第一選手の敵たる米中第二と當れり彼は昨年當大會に望みて我が第二選手を破りし仇敵なり。我初陣なれどもいかでか彼等が如き者に破られん物ぞと胸中深く決心せり。其の夜宿に在りて策戦に餘念なかりき。明くれば八月一日我等が幾多の辛酸を嘗め盡し待ちに待ちし奮闘の日は來りぬ。此の日たるや天澄み渡り絶好のボート日和なり。東天白み鷄鳴曉を告ぐる頃既に起き齊戒沐浴前なる天孫神社に詣て必勝を祈願す。午前七時四十分會場に集合す。八時十分昨年の優勝校宇和島中學、御影師範より優勝旗を返還す。終りて荒木會長の訓話あり。八時四十分第二十四回全國中等學校優勝競漕大會は大商、小濱中學、城東中學のレースを以て火蓋を切れりかくて第三回午前九時廿分第一選手の起つ時は來りぬ。先輩諸兄の「必ず勝て今だぞ」と

も刀折れ矢盡きて和中グループに名を爲さしめたり。

グループ左の如し

- 舵手 馬淵 丹次
- 整調 北川 四郎七
- 五番 山岸 殿
- 四番 北村 秀康
- 三番 北村 彌一
- 二番 長谷川 鋭吉
- 艇軸 西川 駒太郎

野球部部報

- | | |
|----|-------------|
| 部長 | 花月 純誠先生 |
| 理事 | 桃井 勝人先生 |
| 委員 | 森脇金太郎先生 |
| | 須山清太郎 中井 憲也 |
| | 西村 敏三 三浦 章 |
| | 室居 高正 西濱 捨三 |
| | 竹中 正 |
| 部員 | 淺野 清 奥村 文吾 |
| | 堀江 耕次 筒川 敏夫 |
| | 藤村由次郎 古澤 進 |

叫ばれる聲を後にして乗艇す。急激の如き拍手裡にサリユートを終えて曳船に着く。スタートに向ふ間三艇黙々たり。彼勝か我勝か？スタートに着くや燃ゆる血潮を押沈めオールを握りて奮烈船の用意を今や晩しと待ちかまふ。俄然一發火蓋は切られぬ。スタートに於て青滑り出し真く赤我と平行す。十本二十本力漕は加へられたり。長期の努力鍛へし腕を示すは今ぞ急調もて進む。青依然赤白二艇に先んづる事一艇身我悠々之を追う。五百六百に至りて赤又我先んず。六百米を過ぐるやミッドルヘビーを絶叫して赤に肉迫し更に青に接せんぞ。猛烈なる肉搏戦彼我共に力漕す、かくて千米に至りてラストヘビー物凄く青赤を追ふ、然れども如何せん二艇身の差を以て丸魚名を爲せり。米子亦我と枕を並べて憤死す。噫！榮華の夢は醒めたりしか天なる哉命なる哉敗残の士の瞳は悲奮の涙に曇れり。

第三回

- 九龜中學 青 一コース 一着 五分六秒
- 米子中學 赤 三コース 二着 差一艇身
- 彦根中學 白 二コース 三着

- 前川 修 宇野 一雄
- 那須 凌岳 西堀 新次
- 西野健太郎 榎谷 正雄
- 西川 滿之 一居 保三
- 宮崎 信義

我が部は辻、藤本、伊藤、藤村、青山の五氏の卒業によりチームは殆んどフレッシュユマンのみにて、本年度の戦は一般に不成績の如きも一年の試練期を終りたる選手の明年度の活躍こそ本年の不成績をつぐなつて餘りある者と信す。

時間の都合により戦績を詳にするを得ざりしは筆者の残念に思ふ所である。

四月二十五日 敦賀遠征

新人の練習不足は敵に乘する機会をあたへて我軍敗る。スコア 三八對零

六月十三日 對八中戦

前川宇野のバッテリーにて我が軍勝つ。

十一月十一日

六月二十日 名古屋遠征對愛知一中戦再び敗北す。我が部創立以來一中と戦ふ事數回に及ぶも一度も戦運に恵まれず、諸君の發奮を望む、思ふに我と彼の相違は意氣にあるのみ

第十三回午後二時第二選手は第一選手の仇否昨年の恥を雪ぐべく起てり。美事なるサリユートを終へてスタートに向ふ。號砲一發兩艇等しく滑り出づ。俄然初より猛烈なる白熱戦なり。一進一退敵々相摩し、容易に勝敗の豫斷を許さざりき。九百に至りて我一艇身彼に先んじらる。ラストヘビーと共にゴール目指して力漕に力漕を加へて突進し、彼我の距離半艇身となる時に號砲天に轟く。噫我敗れたリラストの力漕も功を奏せずシート之差を以て倒れたり。嗚呼！何たる恨事ぞ兄弟共に石場の露と消ゆるさは。唯々校友諸兄の御寛恕を乞ふのみ。

因に出漕選手左の如し

第一選手

舵手 安澤松兵衛

第二選手

舵手 尾本 市平

- 整調 本田 一男
- 五番 江畑 助雄
- 四番 原田 富藏
- 三番 西川 佐平
- 二番 江龍 謙二
- 艇軸 杉本 直三
- 二番 清水五位太
- 艇軸 和田 孝夫

七月十一日 敦賀近府縣中等學校選拔大會參加

一回戦小濱中學對本校 小濱善戦せしも遂に我が勝利に歸す。

二回戦京都一商對本校

我が投手淺野對小濱戦の直後強敵を向ふにまはし孤軍奮闘せしも遂に我軍敗る。

我が部は京津大會にそなへんが爲慶應大學選手青木、楠見兩氏の指導の下に連日猛練習を重ね、七月二十四日京都に出發す。

京津大會の記

一回戦 對八日市

十對零五回にて勝つ

二回戦 對福知山戦

十對零五回にて勝つ

三回戦

我々にさり最後の時は來た、我れにして此の一戦に勝たんか、我等が常にあこがれの的甲子園に出陣は疑ひなし、一敗地にまみれんか、再び此の期は至らず、北陸の戦に於ける復讐戦なるかならぬか、我等はかたずを吞ん

で戦を注視した。

来たり、見たり、敗れたり、我はベンを取
るを得ず、我等が夢は餘り華かなりしを悲む

岐 滋 大 會 記

来れり!! 岐滋大會 去る神樂ヶ岡での情
敗後、鋭へに鍛へた健腕もて連敗の汚名を雪
んと部員の意氣すさまじ。

○第一回戦 不戦一勝

○第二回戦 八商との戦

二十四日午後一時球審宇野氏壘審佐藤氏の
下に本校庭にて火蓋さる。本校先攻なり。

第一回表 古澤第一球を二壘打に出で西堀
の遊脩に三壘を得奥村の二壘打に出で西堀
す續く浅野左前安打を放ちし時奥村壘審し既
に二壘にありて三壘をさる、筒川の遊壘強襲
に奥村生還浅野三壘に入り筒川一壘に安全、
堀江中左間の好安打に出でし爲筒川三壘を得
浅野生還す。つゞいて藤村右前安打して筒川
生きたり。壘審して二壘にあつた堀江藤村の
安打に三壘を突破して我五點を占めたが藤村
二壘の際に倒れ那須の三振に止む。裏 若原
の右飛後伊藤に四球を與へ善利の安打に二進
と高井の二壘一失に生還したが善利の壘審を

々體の緒をしめ第二回にうつる(大零一彦四)

第二回表 西堀の三振後奥村中越三壘打し筒
川の三壘打に生還筒川壘審して三壘を得たり
浅野バンドして出で筒川生還し堀江の遊脩藤
村の遊脩失那須の中飛失に浅野生還宇野二飛
裏 藤村を投手に立て浅野を左翼に送る高谷
投捕二者三振(大零一彦三)

第三回表 古澤安打西堀バンドに出で續く奥
村の左越大本壘打に走者一掃す、筒川右前安
打したが浅野の遊直に重殺されたり堀江安打
して後藤村の好二壘打ありしが那須の遊脩に
終る。裏 浅野を右翼那須を左翼西堀を三壘
堀江を遊壘に送る、敵凡退す(大零一彦三)
第四回表 宇野、古澤共に安打し西堀三壘打
を飛ばし奥村二壘打し筒川の安打つゞきしに
浅野遊脩して重殺を喫せらる。裏 浅野のか
はり新らしい辻村選手を以て補ふ。敵依然
振はず(大零一彦二)

第五回表 堀江三壘後藤村バンドに出で
那須の遊脩失宇野の左飛失に送られたが古澤
の三壘に三本間に刺さる、西堀、奥村の二安
打に走者生還して四點を添ふ。裏 高谷三振
青木長瀬共にフライ(大零一彦四)
第六回 兩軍無爲なり

倒し鈴木木の二壘に敵勢振はず(八一彦五)
第二回表 宇野四球に出たが古澤左飛後西
堀の投脩に二壘に刺さる。形勢少しく不振の
状に見えたが三番打者の奥村バツタボックス
に立つや左中間を抜く好安打に出で浅野中壘
越の大三壘打をかつ飛ばし、筒川の安打又中
右間を抜いて我續々生還す、堀江、藤村共に
出で那須、宇野の二安打に二人生還したが那
須三壘に刺さる、我が軍の形勢よし。裏 三
者凡退時に八商應援團必死になつて聲援す。
我劣らじと之に應じたり(八零一彦六)

第三回表 古澤の左越大三壘打奥村の中前
安打浅野二壘打堀江の中左間安打ありて三點
を得。裏 山本三振後若原安打し伊藤の右前
安打に二進して三壘に據り善利の三振後高井
の遊脩一失生還したが鈴木の中飛に止む。
(八一彦三)

第四回表 藤村、那須、奥村の安打あり。

裏 無爲(八零一彦一)

第五回表 浅野四球を利し筒川遊壘を突き
一壘に據り堀江遊脩失に出でたが投、捕手に
はかられ浅野、筒川惜死、藤村、那須共に
出で宇野の中前好安打に堀江生還後古澤左翼越
に三壘打を放ち全く敵を壓したり。裏 山本

第七回表 藤村内野安打に出で那須の投脩
に二壘に進み宇野の中左間安打に生還せしが
續く三者凡打。裏 馬場三振二者凡打

第八回表 筒川投脩後右翼手浅野に代つた
辻村中右間安打して初陣の功名を立つ堀江の
遊脩に二壘を得藤村のバンドに三壘に送られ
投手の暴投に生還那須宇野出たが藤村三本間
に倒る。裏 高谷中飛青木中飛失長瀬の遊脩
失に二走者ありしが小林三振辻本一壘(八零
一彦一)

第九回表 古澤バンドに出で西堀安打し奥
村の投脩に各々進み筒川の右飛失に古澤生還
す、辻村中飛堀江三壘。裏 二者三振小西三
飛(八零一彦二)

斯くして準優勝戦は終つた。午後零時
因にメンパー左の如し

中	澤堀村川	浅野江村	須野村
彦	古(三)	奥(9)	浅(7)
二	左捕中	投(遊)	投(左)
30打	數54	得點8	19
0得	點19	2	2
0安	打2	2	1
0二	打2	2	1
0三	打2	2	1
0本	打1	3	
12三	振		

二壘若原左飛伊藤四球を得たが善利三振す。
兩軍のスコア既に十九對三球審宇野氏はコ
ールドゲームを宣せられたり。

中	澤堀村	野川江村	須野
彦	古(四)	奥(遊)	浅(投)
二	左捕	投(中)	遊(右)
36打	數19	12	1
19得	點12	1	2
2得	點4	3	0
4安	打6	3	0
6三	振0	2	3
0三	振		

商	原藤利	井木林	永本
八	若伊善	高鈴若	德山
遊	捕一	投三	左二
			中右

○準優勝戦 (第三回戦)
明くれば二十六日天稍々曇つて最好野球日和
なり午前九時本校庭に於て大商と交戦球審西
村氏壘審吉田氏 先攻

第一回表 古澤バンドして進み西堀右翼に
安打し奥村、筒川と共にバンド浅野遊脩に出
で堀江の左飛後藤村中右間安打し三者生還、
那須三振し宇野死球古澤遊飛。裏 三者凡退
して勝敗既に決せるもの、如し、併し我は益

商	中場西	田谷木	瀬林本
大	田馬小	紫高	青長小
一	三遊	右投	二左中
			捕

○優勝戦

相手は好敵中我が軍は飽くまで積極的戦法
にて此れに當る。開戦の二時三十分は来れり
球審竹中氏壘審阿部、西村兩氏、本校先攻

第一回表 古澤三振、西堀三壘後奥村中右
間安打を放つたが浅野の投脩に効を奏せず。
裏 浅野一飛後、高木三壘一失に出で一舉
三進して本壘を踏みたり。安田左飛早崎飛飛
(岐一彦零)

第二回表 筒川三壘失に出で堀江三飛し藤
村の投脩に筒川二壘に刺さる那須死球に出で
藤村二壘に送られたが宇野一壘して終る。
裏 河田三壘に出で西川のバンドにて二壘を
得たが高橋三振山本二壘(兩軍零)

第三回表 古澤左前安打し西堀のバンドに
送られた時奥村二壘を強襲しその失に古澤を
還し血なはく様な接戦なり浅野安打を放して
有望なりしが筒川三壘堀江中飛。裏 佐々木
三振浅野投脩した後高木遊直失に出で安田の

中越三壘打に本壘に入り又一點を加ふ早崎遊
部(岐一彦)

第四回表 藤村三振那須遊部宇野好安打に
出でたが古澤捕飛して止む。裏 河田三壘失
に出で西川のバンド効を奏せしめて河田二壘
に倒る高橋三壘し三壘堀江の好投に西川二壘
に據れず山本四直(兩軍零)

第五回表 西堀三壘失に出たが奥村の投部
に二壘に刺さる奥村二壘を盗み浅野の三壘に
三壘を得たり筒川左前に安打せし爲奥村生還
堀江投直失に走者一、二壘にある時藤村左中
間に大安打して堀江生還す那須三振。裏 三
者邪飛(岐零一彦)

第六回表 宇野中前安打し古澤遊部失に出
でたり、西堀ツウストライク後バンドして
アウトになり奥村遊部して宇野三壘を得ず捕
逸に走者各々一壘を得浅野の三壘失に古澤本
壘に入る、筒川二飛。裏 安田遊部早崎一直
失に二進し河田遊飛後西川の安打に生還す、
西川自身も一壘三壘を突破して本壘に入れり
高橋二飛、に於て兩軍四對四なり我敵を打
破せんすれども敵屈せず敵も亦我を壓せん
さしても我依然として倒れず意氣さ意氣さの
激しい戦(岐二彦)

不振なりしも我が軍優勝しカップは再び我
が手に歸す。

彦根高商野球大會

一回戦 不戦一勝

二回戦 對平安中學戦

九回迄戦はクロツスにて進みしもラストの
回に至り我れ勝運に見はなされ敗る。

四月對三

最後に臨みて

戦跡を顧れば大會に参加すること四度に及び
二回迄優勝せしも我等が最後の目的を貫徹し
得なかつた事は我等の憾とする所でありませ
我等の努力の足りなかつた事は深く、愧入る
所であります。又練習不足と共に試合不足も
交つてゐる事は事實であります。然しながら
戦闘に於て銃後の人の必要なる如く、我々には
熱心なる後援者が必要であります。僕等の
毎日の練習に際し少しの人でも短い時間で
も、練習を見て下さる方があつたら、僕等
は試合に應援はしてもはななくつても好いの
です、本校の或る方が選手は好きだからやつ
てゐるのだとおつしやつたを承りました。勿

第七回表 三者凡打。裏 高木二壘打せし
が後援空し(兩軍零)

第八回 無爲

第九回表 我最後の打撃なり敵最後の守備
なり兩軍の得點相等し今や意氣赤熱して應援
團觀衆も己を知らず先づ奥村拍手勵聲を浴び
て本壘に立つ第一球は逃した二球が投手の手
を離れし其の刹那カーン!!快響して二壘打し
た次は浅野なり我意氣百倍し、浅野の猛打を
念す打つ!! 飛ぶ!! 走る!! 果して左前安
打して走者三、一壘に據る浅野盗壘して二壘
をさりたり、筒川三壘強襲に出でしも無念!
奥村三本間に刺さる。堀江我が形勢を鑑み絶
好のパウンドに出づ、如何に投手の確捕も及
ぶべき堀江の儀打に浅野本壘に突入し貴重の
一點を得たり。裏 挽回を志してか矛先鋭か
りしが我死守して敵無爲なり。(岐零一彦)

斯くて午後五時火の出る様な苦戦の後大敵
中を倒して遂に會長大日方氏から榮譽の大優
勝旗を授與さる。金龜御城は夕陽に映へ舞ふ
まじも大勝を祝するが如し。嗚呼痛快なりし
勝戦

衷心感謝す。應援團健兒諸君連日暑さを忍
び且熱烈なる應援の下に我等を激勵されしを
論好きでなくちや出来ない事です、然ししく
ら好きだからと云つても七月の失天の下に好
きばかりで誰か死ぬ様な練習をするのですか
諸君は戦勝の華さをのみ思つて戦敗の苦しさ
を思つて下さつた事がありますか、此
の如き人は運動精神を少しも解しない人なる
事を斷言致します。諸君敗れる事は勝利の基
礎であります。本年の失敗をゆるし來年の活
躍を期待して下さい。

庭球部報

部長 中川 先生
理事 野間 先生
委員 杉本 先生

五年 竹村一太郎 上坊十右門
四年 宮川卯右門 林 俊夫
三年 高田外次郎 西川 英吉
選手
五年 知田 義一 百々増次郎
四年 植田廣三郎 山崎 壽男
三年 毛利 好輝 齊柳 圓治
四年 林 俊夫

因にメンバーを報告す

中 澤堀村 野川 江村 須野
彦 古 西 奥 淺 筒 堀 藤 那 宇
二 左 捕 投 中 三 遊 右 一
40 5 9 5 0 1 2 5 3 1 0
數點打振球球打壘策打打
36 4 3 8 3 0 0 2 1 5 1 1 3
野 木 田 崎 田 川 橋 木 木
中 淺 高 安 早 河 西 高 山 佐
遊 一 捕 左 三 投 二 左 中

三高近府縣選抜野球大會

對平安中學戦

バッテリ淺野、奥村の負傷は我が軍を危
地に陥れ我が軍敗る。六對零

甲子園滋賀縣下中等學校 野球大會 (十一月三十一日)

一回戰對膳中戰 スコア一三對二
我が軍振はす最後迄クロツスを續け遂に勝
つ。

優勝戰對八商戰 スコア一六對二

三年 安居榮之助 内片 陸朗
二年 木村 三雄
一年 小川 芳雄 北村 政久
西堀 正式

(百々記)

昨冬森君を送りたる我が部は伊吹の殘雪未だ
鹿の子の如く春尚淺き三月より愛校の血に燃
ゆる十餘名の選手を組織し必勝を期し意氣や
揚々此處、金龜ヶみ城を仰ぎつゝ、猛練習を開
始せり。

五月廿三日

八幡商業を迎ふるの記

本年度新チーム最初の試合にして、練習を兼
ね八商軍を迎ふ。戦跡次の如し。

八 商 本校
シナガルス
3 望 月 六 三 百々
2 森 川 六 二 植 田
1 馬 場 六 二 知 田
ダブルス
3 (本) 勝 間 五 一 六 三 (安) 青 柳 居
4 (前) 熊 田 四 一 六 2 (毛) 植 利 田
九 五

2 (雨) 森 五—六 1 (知) 田
渡 邊 五—六 1 (知) 田
1 (望) 川 六—二 (植) 田

先づシシグより始む。本校シシグは始め
てより、未だ日浅く老巧なる八商軍の爲一敗
地に塗れたり。シシグに續きダブルを開始
す。安居、青柳共に本日な以て初陣なれども
善戦し始より敵を壓し先づ凱歌我に揚る。續
く植田、毛利組難なく敵を破り、次いで本校
1と敵2と當り悠々、勝利を占め此處に三對
三の同點となる。本校知田、植田をして殘る
敵に向はしむ。本校最後の止めをさ、んもの
奮戦したれども敵もさるもの遂に六—二の
スコアにて敗退の止むなきに至り、四對三に
惜敗せり。

六月五日岐阜中學主催

近府縣中等學校準硬式
庭球大會出場之記

我部は本大會にZON知田、百々、ZON植田
毛利組を派す。

第一回戦

八商1 (川) 村 六—三 本校 (知) 田

りさ雖、當日のコンテッション及びスコア
の示す接戦より推しても彼に劣らざる自信を
持せしむ。期す今一度の試合を。

七月十八日

京都一中遠征之記

我部は京洛の雄一中にマツチを申込み、快諾
を受けしを以て遠征を企て、幸ひに勝利を得
る事を得たり。

成績次の如し

京一中

本校

4 田 中 一—六 毛 利
3 北 岡 二—六 植 田
2 平 山 三—六 百 々
1 石 河 六—四 知 田
知田 0 5 1 4 4 4 5 8 1 3 4
石河 4 7 4 1 2 3 10 4 5 6

敵將田中、北岡、平山無慘や、もろくも枕を
並べて討死し、次いで本校知田、石河と對陣
す。知田猛練習の結果、右腕を傷けしも押し
て進む。十分勝算ありしに如何せん六—四に
て退く。

悪く、缺員あり、充分なる技を發し得ざりし
は残念なりき。

愛知一中

本校

シシグ
4 伊 井 一—六 毛 利
3 渡 邊 六—四 百 々
2 加 藤 二—六 植 田
1 北 川 六—四 知 田
先づ、毛利敵四將を一蹴し、百々次ぎ一中キ
ヤビテンと接戦し破れしも、我軍の鋭鋒植田
敵なんぞ恐れん二ゲームを許すのみ。次に本
校キヤビテン知田、接戦に惜敗し二對二の同
點となる。

ダブルス

3 (岩) 井 五—六 (毛) 利
2 (足) 立 六—四 (植) 田
1 (加) 藤 (兄) 六—四 (知) 田

安居二度目の戦たりしも山崎に代りし、毛利
さよくチームワークを取り、五—二にてリ
ドし三ゲームを無駄に與ふ。安居毛利の前途
を祈る。二將戦は毛利疲勞の色見え、大將組
接戦すれども効なく破らる。嗚呼、吾破れた

愛知一中遠征之記

六月十三日

毛利サウイズ當りて、三—一リードし勝
利確實易々たりしが油斷の結果五—五となり
大接戦し、遂に京都軍に勝を譲る。

山崎汽車に遅れて不參。曇天たりしも押して
向ふ。正午より遂に降雨を見、雨中のま、試
合を續け、又球の異りし爲、コンテッション

ダブルス

3 (田) 中 五—六 (山) 崎
2 (平) 山 〇—六 (知) 田
1 (北) 岡 六—四 (植) 田
No.1 本校 4 6 3 0 3 1 4 4 2 3 4
京一中 0 4 5 4 5 4 2 2 4 5 6

3 先づ勝を占め、2 美事敵を零敗せしめし後
を受け1の對戦となり、スコアに示す如く
肉迫したれど無念敗退す。京一中二—五本校
因に當日代理野間先生の御苦勞を感謝す。

七月廿九日大阪毎日新聞社主催

全國中等學校準硬式庭球
大會出場之記

愈々目指す濱寺大會は来りぬ。吾等は如何に
本大會を期待し、本大會の爲に奮闘せしか、
全國に覇を稱へんが爲練習に練習を重ね刀折
れ力盡るまで孤軍奮闘せるも遂に榮冠を失す
然れども少なくも湖國健兒の意氣を示すを得
たるを密かに喜ぶ。

嗚呼。今は過ぎに過去を果なき夢となれり

乞ふ期待せし諸兄の御寛恕を。

戦跡次の如し。

廿九日 入場式、優勝旗返還式、國旗上梓式
後、スタンド内第一コートに於て二、三のゲ
ームを経て本校知田對鳥取師範有田の第一回
戦を開始せらる。

鳥師有田 六—四 本校知田
知田 4 4 4 2 3 1 6 6 0 3 4 4

有田 1 2 1 4 5 4 4 4 4 5 6 6
知田のサーヴィスより開始。サーヴィス當り
有田の虛を突き、難なく三ゲームをリードす
然れども敵は斯界に名を馳せたる豪勇、得意
の強サーヴィス物凄く挽回に勉め遂に勝利を
占む。此の戦兩勇チヨツプを以て一貫す。此
處に於て本校シシグ破らる。

七月廿日 ダブル開始さる。スタンド外第四
コートに於て

第一回戦

海南中學 本校
本 (井) 上 二—六 (植) 田
校 (曾) 野 二—六 (植) 田
海南中 0 3 1 1 4 5 2 1 2

百々のサーグイスにて開始さる。失策にて二ゲームを許すのみ幸先よし。

第二回戦 同コートに於て

富山師範

本校

(宮) 本 三—六 (植) 百々

本校 7 4 0 4 4 4 5 0 4 6

富師 5 6 4 1 1 1 3 4 2 3

植田、百々のツォレ、百々のサーグイス凄く終始敵を壓し、敵のスランプに乗じ遠来の將をしてあたら功を空しからしむ。

七月廿日 同三回戦

スタンド内第二コートに於て

京一中

本校

(石) 北 六—五 (植) 百々

本校 4 4 6 5 4 2 4 3 1 1 5

京一中 1 1 4 7 1 4 1 5 5 4 4 6

怨敵京一中にあたる。復讐戦なりしを以て、植田、百々よく奮戦し四—一、五—二までリードし、最早勝利疑ひ無しと見え、敵をして顔色ならしめしも、敵挽回に之れ勉め五—五と爲り、遂に名を成さしむ。此の時スタン

同四日 第二回戦

武生中學

本校

3 (角) 前 田 四—六

(安) 山 居 崎

2 (橋) 進 士 〇—六

(毛) 植 利 田

1 (竹) 小 村 三—六

(百) 知 々 田

同五日 第三回戦

富山商業

本校

3 () 六—四

(安) 山 居 崎

2 () 五—六

(毛) 植 利 田

1 () 二—六

(百) 知 々 田

本校 2 4 2 3 4 6 3 2 5 4 4 6

富商 4 1 4 5 2 4 5 5 3 2 0 5

我々スランプに陥り五—三までリードされ旗色甚だ悪きも残る一ゲームをよく死守しねばり續け必死の挽回に効現れ六—五遂に勝つ。一同いや増す元氣もて準優勝戦に臨む。成績次の如し。

準優勝戦

岐阜師範

本校

3 (河) 合 六—四 (安) 山 居 崎

本校 5 4 2 1 6 4 1 4 4 3 4

岐阜 3 2 4 4 4 6 4 6 1 5 6

安居のサーグイスより開始。しばし敵を窮地に陥れ奮戦せしも遂に破る。

2 (安) 藤 五—六 (毛) 植 利 田

本校 4 2 2 5 5 1 0 4 4 4 6

岐阜 1 4 4 3 7 4 4 1 2 1 2 5

最後のゲームをよく支持し四回續けてリードす。

1 (大) 藤 二—六 (知) 百 々 田

本校 4 4 6 4 4 4 2 4 6

岐阜 1 1 4 6 0 2 4 1 2

(岐阜) 1 對 2 本校

岐阜師は優勝候補校の一に算せられ居りしも我々の向ふ所敵なく必勝の猛將を美事粉碎せり。

同五日 優勝戦

部 報

和歌山中學

本校

3 () 二—六 (安) 山 居 崎

本校 4 7 5 5 3 0 4 4 6

和歌 2 5 3 3 5 4 0 0 2

山崎、安居組敵の油断をねらひ、よくチャンスを握り、山崎ツォレのフラインプレーを見せ大勝し先づ凱歌我に揚る。

2 () 一—二 (毛) 植 利 田

本校 3 4 5 1 2 1 6 4 6 3 4

和歌 0 3 4 4 4 4 6 4 5 6

今日降雨の遅かりせば、此の雨の敗因を作せしは天未だ吾等に幸せざるか嗚呼。

1 (大) 藤 六—五 (知) 百 々 田

本校 4 4 7 1 4 1 4 4 5 5 5

和歌 0 1 5 4 0 4 0 6 7 7 7 6

兩軍同點となり決勝の火蓋は満場の拍手裡に

同七日

縣下中等學校庭球大會

出場之記

九月廿四日舎生の見送りを受け、心に必勝を期しつゝ、中川先生、杉本先生に引率され六時九分の下り列車にて大津に向ふ。

第一回戦

比叡山中學

本校

3 (東) 市 川 野 一—六

(毛) 植 利 田

本校 7 2 4 4 4 4 4 6

比中 5 4 1 0 1 0 0 1

2(北谷 一一六 1(知田
本校 44471446
比中 22054101
本大會本年度はダブル三組の策戦にして比中
と當りZONZONにて大勝す。
同二回戦

膳所中學 本校
2(戴田 六一一 3(山崎
本校 54240101623
膳中 7141484846
敵ZONに肉迫奮戦せしも敗る。
1(中井 六一一 2(植田
本校 314341432
膳中 541514656

植田毛利組一回戦に疲勞し十分なる活動な爲
し得ずZONに破る。
想ふに本大會始めより優勝戦は八商と本校
と専ら噂たりしに美事膳中に策戦の裏をか
れZON不出して策戦負を成したのである。
宥されよ諸兄の期待に背きし事を!!

大會に榮えある月桂冠を得んものと日々猛練
習を續けた。
例年の通り五月十七日大津に於て開らる
べき京津日報社主催縣下中等學校陸上競技大
會は我等の希望を裏切つて支障の爲止むを得
ず行はれなかつた。

○彦根高等商業主催近府縣 中等學校競技大會之記

五月三十一日彦根高商主催の下に開催され
た近府縣中等學校陸上競技大會に参加した。
去年惜しくも此の大會に於て力及ばず惨敗せ
し我部は今年こそは意氣満々として會場に
臨めり。

昨夜より降り續きし雨も名残なく晴れて大
會は午前八時より開かれた。選手入場式後前
年優勝校京都師範の優勝盃返還式ありて直に
フィールド及びトラックの競技は始められた。
この日のメンバーは次の如し。
トラック
百米 北村秀康
北村スタートと共にピッチの出方目醒し
く第一位にて進みたれどラストコーナー
に於てや、遅れゴールインと共に第三位

十月廿四日 彦根高商主催 近府縣中等學校準硬式 大會參加之記

我部は高商の招待を受け知田、植田組を派
す。
第一回戦

京都農林 本校
(六一一四) (植田田)
本校 2344415514
京農 4502243746
一進一退遂に退く。因に臨時試験直後の事と
て練習不足の點あり、詮方なく京都軍に勝な
ゆづる。

大正十五年度を顧みて

本年度も高商大會を以て名残多き終を告げ
たり。回顧すればうら寒き三月より、秋も末
の十月に至るまで猛練習の甲斐なく、惨敗を
以て一貫し、諸兄の期待に背く事幾度熱情あ
る御後援に裏切りたり。
然れども吾等選手は熱心に練習し苦しき經
験をなめ少からざる犠牲を拂ひ、我彦中スボ

1ツの爲に有りたけのベストを盡せり、然る
に天は吾等をしひたげ惨敗を以て之に報いん
とは一寛大なる諸兄よ何卒我等の胸中を察
し容赦賜ふと同時に今後一層の御後援を賜へ
終りに校友會諸兄の御健康を祈る。

陸上競技部

大正十五年度競技部々報 織田誠一記

部長 寺一先生
理事 長谷部先生
主將 北村秀康
選手 北村秀康 北村光三
小林英太郎 澤井謙吉
江畑啓一郎 古澤進
織田誠一 南條六郎
尾本市平 飯村天祐
上林道 以上

本年度のチームは大谷主將以下川崎、尾本
小玉、橋本、安居の諸選手を送り出して幾分
の痛手はあつたれども四月の新學期より數
名の新選手を加へ陣容を充分に備へて今年こ
そは年來の希望通り京津の覇者として幾多の

二位となりて三點を得。

南條のレコード 十二米十一

棒高飛 南條六郎

試合は益々熱狂的となり名古屋の雄彦根
の雄居残り五に一二を競ひしもついに南
條敗れ第二位に退く。

南條のレコード 九呎五吋 得點三點

此の日南條盲腸炎を病みたりしもよく奮闘
し彦中の校名を一層輝やかせしことを部員深
く感謝す。

リレー 北村秀、澤井、江畑、尾本市
各選手ベストを盡して戦ひたれども第三
位となる。

此處に於て我が競技部員は校友諸君の熱誠
なる應援に酬ひんとベストを盡し奮闘したれ
どその功空しく六點を占めしのみ終に優勝の
榮冠は京都の雄平安中學に奪はる。

○八高主催全國中等學校陸 上競技大會之記

暑中休暇中彦根高商のグラウンドに於て毎
日炎天下に練習を積んだ。九月に入りスポー
ツ時季を幸に一層練習に勵んだ僕等は愈々九
月二十三日八高の晴の舞臺に立つことになつ

た。

我等は六百健兒の應援に送られ九月二十二日書過ぎの上り列車で名古屋に向つた。午後七時過ぎ着名するや直に八高前明治屋旅館に投宿した。その夜は皆よく眠つて明ければ二十三日我等は非常な元氣で會場に向つた。

午前八時半から選手入場式及び前年優勝校龍野中學の優勝旗、優勝杯の返還式があり参加校は實に四十餘校の多數に上つた。式後直に競技は始つた。その日の我々のメンバーは次の様である。

トラツグ

百 米 北村秀康

二百 米 北村秀康

千五百 米 北村光三

八百米リレー 北村秀、小林、織田、尾本市

トラツグ

圓盤投 北村秀康

砲丸投 織田誠一

走高飛 南條六郎

走中飛 南條六郎

北村光三君は第一第二豫選に第一着でパスし決勝に臨んだが惜しくも第四位にて得點なし。

得點なし。

思ふ。

江畑努力に加ふるに努力を以てせしも如何せん終に敗る。

八百 米 北村光三

北村悠々を豫選をパスし決勝に向ふビツ

チの出方目醒しく第一位となり最初の五

點を獲得す。

千五百 米 北村光三

北村決勝に於てラストヘビーの出方物凄

く前走者を抜き第二位となる。得點三點

一 萬 米 北村光三

北村千五百の直後にて疲労未だ癒えず残

念ながら三位となる。得點一點

八百米リレー 北村秀、小林、尾本、江畑

一同ベストを盡したれど及ばず退く。

フ イ ル ド

圓盤投 北村秀康

砲丸投 織田誠一

走中飛 南條六郎、織田誠一

走高飛 南條六郎、小林英太郎

ホ・ス・ジャンプ 織田誠一、南條六郎

北村奮闘の甲斐無く退く。

織田ホ・ス・ジャンプと同時に成りたれば

砲丸投棄權す。

部 報

旗及び同校寄贈大花輪は長濱商業學校長より贈られ觀衆の拍手裡に歸校す。

○栗太體育研究會主催縣下中等學校陸上競技大會記

運動會以前の猛練習により鍛え上げ腕を以つて十一月八日栗太郡設グラウンドに於て開催せられし縣下大會に参加することせり我等は新部長寺一先生に引率せられ今年、それは此の最後なる大會に奮闘し會稽の恥を雪がんものとの意氣を以て草津に向へり。競技は九時半より開かれぬ。

メンバーは次の様である。

百 米 澤井謙吉、北村秀康

二百 米 澤井謙吉、北村秀康

澤井大會に臨みしも打傷の傷痛の殘念年ら棄權す、北村百米に敗れたれども二百米によく奮闘し第二着にて豫選をパスし決勝に臨む。北村決勝に於てスタートの出方悪くベストを盡したれど及ばず終に第四位となる。

四百 米 澤井謙吉、江畑啓一郎

前年のレコードホルダーたる澤井傷の爲出場不可能となり選手一同非常に残念に

大正十五年度校友會各部役員

○學藝部

部長 堀田先生

理事 鈴木先生

委員 (五年)山本捨三 田中真三

(四年)居長英三郎 東 清哲

(三年)上野 正

部長 足立先生

理事 及川先生 山本先生

委員 (五年)小林英太郎 西澤新藏

(四年)高祖 保 麻生龜吉

澤 效一 兒玉琢爾

(三年)川村純一 大島善太郎

山口彌平

部長 花田先生

理事 眞野先生 杉本先生

本多先生 夏原先生

委員 (五年)長谷川鏡吉 山本捨三

西村榮次郎 小川万喜太郎

(四年)瀧上 博 佐々考造

澤 效一 集治政太郎

(三年)曾我繁三 山口彌平

部 報

◎水上部 部長 池田先生

理事 夏原先生 倉橋先生

委員 (五年)本多一男 田富藏

三原文雄

(四年)北村彌一 江龍謙治

辻村軍左右

(三年)大竹徹次 清水伍位太

◎野球部 部長 花月先生

理事 桃井先生 森脇先生

委員 (五年)須山清太郎 三浦章

西濱捨三

(四年)中井愿也 室谷高正

竹中正

◎庭球部 部長 中川先生

理事 野間先生 杉本先生

委員 (五年)竹村一次郎 上防十右衛門

(四年)宮川卯衛門 林俊雄

(三年)高田外次郎 西川英吉

◎競技部 部長 寺一先生

理事 長谷部先生

委員 (五年)北村秀康 北村光三

小林英太郎 江畑啓一

(四年)澤井謙吉

一〇四

古澤進 (三年)織田誠一 南條六郎

尾本市平

◎文庫部 部長 佐竹先生

理事 藤下先生

委員 (四年)大久保眞順 居長英三郎

高橋英男 川村三知雄

(三年)保坂忠吉 大居島謙

園城治平 湯淺誠也

本校日誌抄

◆一 月

一日 午前八時三十分より四方拜舉行

八日 午前八時三十分始業式

十一日 午前五時半武道寒稽古開始、本日より父兄母姉懇親會開始

二十日 寒稽古納會

二十一日 寒稽古納會を午後〇時十分より開

き午後二時閉會

二十七日 朝禮の際寺一先生の就任式舉行

二十九日 臨時試験開始

◆二 月

一日 三、四、五年臨時試験終了

八日 豫定の通り査閱官來校午前九時四十分より午後三時舉行

十日 四時限切捨て午後校内外の特別大掃除をなす

十一日 紀元節祝賀式舉行

十三日 森岡督學官來校授業參觀

十九日 兎狩り舉行、一匹捕降雨の爲め午後〇時半解散

二十四日 佐久間先生令夫人御子息及び實兄來校あり生徒一同の弔詞、弔慰金手交す

◆三 月

三日 四年生は試験終了後各教室の大掃除をなし後終業式、午前九時五年成績發表

七日 卒業式午前十一時開始内務部長臨席

十日 四時限目に於て講堂に寺田少佐殿の陸軍紀念日に關する講話あり

十二日 質問日授業休み

十六日 終業式

廿二日 三年以下成績發表

廿六日 入學選拔試験舉行

廿七日 入學試験午後口頭試問

廿九日 成績發表

◆四 月

二日 杉本先生來任

四日 夏原先生着任

五日 石塚先生來任

七日 夏原、石塚、杉本先生の紹介式午後一時より新入學生の入學式

八日 午前八時始業式後保坂先生の告別式

十日 級長、副級長の選舉、大掃除舉行

十三日 級長、副級長及學友區、區副區長に辭令を渡さる

十六日 朝禮の際學友區分に生徒を分類集合せしむ

二十日 一年全部及二年一部の身體検査を行ふ

◆五 月

一日 午前八時大原内湖辨天下に集合創立紀念日に關する式辭を擧げらる引續きボート競争會開會

六日 三時限開始後招魂社に參拜

七日 柔道教師河野先生森川先生御來校四五年合併實地敷せらる

十日 自轉車通學の範圍を示す、五年一同

講堂に於て校長より修學旅行の注意を受く

十二日 五年修學旅行出發

十四日 四年修學旅行出發、放課後五年講堂にて校長より旅行注意を受け後保坂先生より進水式に關する講話あり

十五日 倉橋先生より一年に修學旅行關する講話あり

十六日 第三學年修學旅行出發

十七日 一、二年修學旅行出發、各旅行隊歸校す

廿二日 ウォーキングマン秋光重之氏來校速歩に關する講演あり

廿七日 講堂にて海軍紀念日に關する訓話

◆六 月

一日 本日より夏服着用

十日 李王殿下御事跡に關し講堂にて倉橋先生より講話

十六日 三、四、五年發火演習

十九日 一、二年野外演習

廿六日 學期試験

三十日 大掃除學期試験終了

一日 武道進級者發表

十二日 水泳練習開始、短縮授業開始

十六日 午後一時栗田農學校武道選手來校道場にて稽古をなす

廿四日 終業式

廿五日 本日より夏中休暇

◆九 月

一日 八時十分始業式、大掃除、運動部選手職員道場にて校長より訓示を受く

十三日 午前八時より海軍簡閱點呼あり海軍中將安保中將參列せられ午後一時講話引續き杉本大佐講演あり

十六日 本縣學務部長殿來校

廿二日 招魂社參拜

廿七日 四、五年生午前六時二十五分數賀兵營見學の爲め出發

廿八日 佐和山神社參拜

三十日 兵營見學隊歸校す

◆十 月

四日 近鐵發着關係により朝禮を八時二十分さす

九日 本日より臨時試験開始

十二日 臨時試験終了

十六日 學藝部辯論大會を開く

廿三日 長慶天皇皇統諸に列せられ賢所皇靈殿神前に報告の儀行はせらるるにつ

き一日休校す

廿六日 午後四時知事來校

廿一日 午前七時四十分集合、遙拜式引續き運動會開會式午後三時二十分閉會四

五年生徒五時集合陸上演習參加の爲出發

十一月

一日 午前四時三年以下集合四時三十分演習參觀の爲め出發、十時二十分解散

三日 運動會後片附、各競技に對する賞品授與及び辯論大會の受賞者の賞品授與、運動會に對する講評

八日 祝勝野球大會舉行

十三日 行幸紀念式舉行引續き武道大會

十七日 五年生測圖演習の爲め鳥居本方面に向ふ

十八日 武道大會受賞者賞品授與、四年野外演習に出發

廿六日 學期試驗開始

三十日 學期試驗終了、後大掃除を行ふ

十二月

二日 四、五年八時四十分野外演習に出發

大正十四年度校友會費支出決算書

支出豫算 支出決算 差引

短艇新造費積立

同本年度積立

防球工事費積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

同本年度積立

三年午前九時出發
午後教育映畫參觀出發
本日より父兄母姉懇談會開催
聖上陛下御體御平癒祈願のため千代神社に參拜す、父兄懇談會は昨日終了
了す
十八日 一、二三年野外演習に出づ
終業式舉行大掃除、四年川村三知雄君表彰せらる
廿四日 午後一時半より大行天皇の崩御遊ばされしに付き奉悼式を舉行す
廿七日

會計報告

大正十四年度校友會費收入決算書

科目 收入豫算 收入決算 過不足

前年度繰越 一、四一〇、八三三 一、四一〇、八三三

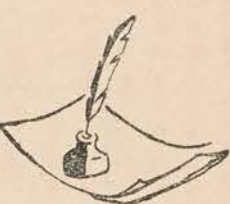
新入會費 一三三、〇〇〇 一三三、〇〇〇

預金利子 五五、〇〇〇 五五、〇〇〇

職員離金 一七五、六六〇 一七五、六六〇

生徒離金 三、八四三、〇〇〇 三、八四三、〇〇〇

計 五、六三三、〇二二 五、六三三、〇二二



編輯 後記 高祖生

十四年が幾多御目出度に充ちた年であるに反し、今茲十五年はどうかして斯くも悲傷に充ちた年であらうか、思ひかへずして振り返りみるに、それにしても沼津の大火をきつかけに數々の惨事はあまりに目まぐるしい。悲雨慘風、數多の世事は心しげく時代の鏡上に去來する。昨日の大層高樓は今日砂上の夢に等しい。まことに夢幻泡影、現世また一場の春夢にほかならない。

◆次に筆硯を新にして三三申す。

投稿は今少し自選したものであつて欲しい文字はもつと丁寧で、書きまばし書きなぐりは遠慮すべきである。徒らに檢閲者の目を悩ます亂暴無稽の原稿を思ふ。總じてもつと量より質を重んずべきである。原稿自體が、即ちその人の品格如何を明示する。

◆本誌投稿者がある一部のものに、みに限られてゐる如き觀あるが、此れも等しく諸子周知の事實だらう。もつと元氣を出してドシ／＼佳作を寄せられたい。新進氣鋭の人、宜しく以て發奮勉強すべきである。特に、五年の委員諸君が多忙なる爲、舊越年ら自分代つて後記の筆を採る。口幅ひろい申振りは幾重にもお詫びをする。

◆時やよし、宛かも露霜沓えて松菊の猶頭きを看るの候、世は寒うして刷新の氣いち速く幾多侃諤の論また溢出するかともあれすべて諸子の凛たる鋭筆に俟つ。

道具費 五〇、〇〇〇 五〇、〇〇〇
臨時大會 五〇、〇〇〇 五〇、〇〇〇
雜費 一五〇、〇〇〇 一五〇、〇〇〇
豫備費 五、〇〇〇 五、〇〇〇
計 五、六三三、〇二二 五、六三三、〇二二

大正十五年度校友會收入豫算調

科目 豫算 備考
前年度繰越 一、五五、六三三
新入會費 二二二、〇〇〇 四月現在ニヨル
預金利子 五〇、〇〇〇 預金減少ニ付減算
職員離金 一七五、六六〇
生徒離金 三、八四三、〇〇〇
計 六、三三三、七二二

投稿の注意

- ◇投稿者は所定の原稿用紙を用ひらねたい。
- ◇原稿には年級姓名を明記し、各種類に依り別紙に認め、雅號匿名は許さない。
- ◇點、丸、括弧等は一字に算入する。
- ◇他人の名譽を毀損し、論の政治的時事に涉るものは採用しない。
- ◇投稿締切期日は必ず嚴守すること。
- ◇原稿の採否は凡て雜誌部々長及び理事の鑑識の範圍とする。
- ◇原稿の返戻は一切應じない。

明治二十七年五月三十日内務省認可
昭和二年二月二十五日印刷
昭和二年三月一日發行

(非賣品)

發行所 滋賀縣立彦根中學校 校 友 會

代表者 足 立 熊 雄
滋賀縣立彦根中學校内

印刷者 村 下 斯 康
滋賀縣彦根町字五番六二

印刷所 村 下 活 版 所
滋賀縣彦根町字五番六二

